小特集＊スポーツ社会学の理論的可能性

伊藤 公雄 山下 高行 菊 幸 一 吉見 俊哉

キーワード：スポーツ社会学理論、カルチュラル・スタディズ、フィギュレーション社会学、
運動会、近代日本スポーツ

目 次

はじめに.....	伊藤 公雄 (大阪大学)	1
ブリティッシュ・カルチュラル・スタディズとスポーツ研究.....	山下 高行 (立命館大学)	3
エリアス派スポーツ社会学と身体／Body	菊 幸 一 (奈良女子大学)	15
日本のスポーツと身体／Body	吉見 俊哉 (東京大学)	26
質疑応答.....		32

はじめに

本小特集は、1996年3月、宮城教育大学において開催されたシンポジウム「スポーツ社会学の理論的可能性を探る」における報告とその後の討論をまとめたものである。

周知のように、このシンポジウムは、1997年3月、京都の立命館大学での学会大会と同時開催が予定されている国際シンポジウムと連続する一連の企画の一環として研究委員会の手で準備されたものであった。近代スポーツの変容を身体という観点から考察することで、現代スポーツ社会学の理論的パースペクティヴを会員諸氏と大枠の部分で共有し、予定される国際シンポジウムをより実りあるものとしたいという発想から研究委員会の今回の宮城でのシンポジウム企画は出発した。シンポジウムは、現代スポーツ社会学理論の二つの流れ（予定される各国のスポーツ社会学研究者の多くは、いずれかの流れと関係をもつ論者が多い）、カルチュラル・スタディズ派の理論とエリアス派の議論を整理し、その上で、近代日本社会におけるスポーツ文化の流れと重ね合わせるという方向性

で行われた。

しかし、今回のシンポジウムは、会員相互のコミュニケーションという点では、いくつか問題を生んだようだ。特に、司会者の不手際と、理屈っぽいしかも込み入った議論を口頭で語るという方法は、報告者の意図が必ずしも会員諸氏に十分に伝わらず、隔靴搔痒の思いを抱いて帰られた会員の方も多かったのではないかと危惧している。とはいっても、今回のシンポジウムは、その議論の質においても、また討議におけるやりとりにおいても、今後のスポーツ社会学の理論を深めていく上で、きわめて重要な内容を多々含むものであったことは間違いないところだと思う。そこで、改めて、この『スポーツ社会学研究』誌上をお借りして、シンポジウムの全容を再現することで、会員諸氏と議論を共有したいと思う。

今回のシンポジウムは、すでに述べたように、カルチュラル・スタディズ派とエリアス派という二つの潮流の議論を整理し、それを日本の近代スポーツと重ね合わせるという意図で出

発した。

報告論文のなかで山下会員がたいへんうまくまとめているように、近年、あらゆる領域において隆盛を見せ始めているカルチュラル・スタディーズ派の議論の軸は、ポピュラー・カルチャーを対象にした批判的文化研究という点にその特徴があると思われる。カルチュラル・スタディーズ、特にイギリスにおけるそれは、広義のマルクス主義の影響があり、特に、アントニオ・グラムシに代表されるヘゲモニーという問題関心が控えていることは山下論文が指摘している通りである。

ヘゲモニーという観点は、これまでの支配的文化と従属的文化の関係を、単に「押し付けられた支配的文化」という視点でとらえない。むしろ、従属的文化に属する側が、支配的文化との対立・葛藤の一方で、さまざまな媒体の調停・融合を通じて、自ら支配的文化に組み込まれていくプロセスをも射程に入れている点に特徴がある。

スポーツ文化もまた、こうしたカルチュラル・スタディーズの視点から解剖されることで、新たな視座を獲得してきた。ハーグリーブスらの仕事は、そのひとつの典型例といえるだろう。

スポーツ社会学の理論において、こうしたカルチュラル・スタディーズの議論としばしば論争を繰り返しているエリアス派の議論を、きわめて鮮やかにまとめたのが、菊報告であった。

エリアスのフィギュレーション社会学と、その影響の下で今大きな発展を見せようとしているダニングらのイギリスのスポーツ社会学の特徴は、これまでの、何か主要な原動力があって、その影響のもとで歴史が展開していくという単純な議論に批判的である。これもよく知られているように、エリアスの『文明化の過程』の議論に典型的なように、さまざまな要素の相互依存と相互補強のなかで、歴史のダイナミックな生成という「プロセス」が論じられるてい

るからだ。菊報告は、こうしたエリアスの複雑な議論をていねいに論じるとともに、その骨組みを明らかにしてくれたと思う。特に、感情抑制・暴力抑制のプロセスと近代スポーツの成立についてのエリアスの議論のまとめは、司会の私に「これを使えば三回は講義ができる」と語らせたように、秀逸なものである。

運動会と近代国民国家形成の運動プロセスを論じた吉見報告は、これら二つの議論を、日本近代社会と重ね合わせるという点で、シンポジウム企画のねらい通りのものになったと思う。「運動会」というある種の「近代日本の発明」が、国家意志と民衆意識のズレ、対立、親和のなかで定着していく様子を描いた論述は、カルチュラル・スタディーズ派とエリアス派の議論の、ある意味での融合といってもいい内容をもっているからだ。なかでも、理論を具体的な現実に適応させていくという点で（あるいは、現実の歴史分析のなかから新たな理論的枠組みを紡ぎ出していくと言った方がいいのかもしれないが）、たいへん興味深いものであった。

すでに述べたように、本小特集は、これまで述べて来た昨年のシンポジウムのまとめである。当初は、報告者から改めて論文の形で提出してもらい、伊藤が前書きで全体をまとめる、という予定であった。ところが、当日の報告を記録したビデオテープから起こしてみたところ、討議においても捨て難い多くの示唆に富む意見が含まれていることが「発見」され、また、研究委員会でも、ビビッドな論議をそのまま残したいという声もあり、つなぎの言葉などを削り、一部の言い回しなどを修正することでそのまま掲載するという形をとることになった。

このシンポジウムの記録が、スポーツ社会学の理論的発展のための一助となり、また、1997年の国際シンポジウムの成功にとって有益なものとなれば、研究委員会としても幸いである。

ブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズとスポーツ研究

ここでは特に理論フレームの問題が中心になりますが、カルチュラル・スタディーズについて論じてみたいと思います。この話は菊さんのエリアスの話や、また吉見さんのところとも非常に関連を持って来ますので、それらと結びつくような形で議論していきたいと思います。先ほど司会の伊藤先生からもご紹介されましたけれども、来年度本学会で国際シンポジウムを開催いたします。その中でもやはりカルチュラル・スタディーズをベースに研究をされているアラン・トムリンソンさん、現在のイギリス・スポーツ社会学研究のなかで中心となっている方の一人ですが、そのかたもお招きすることになっているということをご紹介しておきたいと思います。

さてカルチュラル・スタディーズのスポーツ研究は、数年前その代表者の一人であるハーグリーブス氏の著作が翻訳され、日本にも知られるようになってきたわけですが、この著作を読むとわかりますように、広い意味で文化 (a way of whole life)、この中にスポーツが含まれてくるわけですが、これとパワーというものを絡めて見ていこうとするものです。大変雑ぱくにいきますとそういうことになります。これが現在、イギリスを越え世界的にどんどん広まってきたております。アメリカやカナダ、オーストラリアでもこのカルチュラル・スタディーズの研究がすすんできておりますし、アジアでは台湾や韓国にもこの研究の影響を受けている研究者が現れてきています。今日、ここで主に述べたいのは、こういうカルチュラル・スタディーズの流れがどういうものであったかということ、またその中で、スポーツや身体に関わる研究はどのようなものとして出てきているのかということです。幸運なことに、この15日から19日まで、東京大学の吉見先生のところでもかなり大規模なカルチュラル・スタディーズの講演会とワークショップが開かれました。ブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズをつくった四人の中心

人物といわれる人々がいますが、東京大学の講演会のあと、私たちのところでもその一人であるスチュアート・ホール氏 (Stuart Hall)、また若手のアリ・ラタンシー氏 (Ali Rattansi) を迎えて講演会を持つことができました。ここには学会員の方も何人か参加されましたが、私たちにとって非常に幸運だったのは、このカルチュラル・スタディーズの面々が来日されたことによってその考え方が『思想』¹⁾ や『現代思想』²⁾ で特集され、様々な角度から論ぜられたことです。というのは、カルチュラル・スタディーズは非常に多様な言説によって構成されていますのでなかなかつかみ所がなく、理解していくのは難しい面があるからです。例えば本日の午前にマンデル夫妻の講演がありましたが、カルチュラル・スタディーズについて夫妻の把握は私の理解とは少し違っておりました。それは異常なことでも何でもなく、実はつかみ所がないというのがまた一つの魅力を生み出しているような側面もあるわけですが、これらの人の来日を契機にだいたいその全貌というのがかなり見えてくるようになったといえます³⁾。そういうことをふまえてここでは話していきたいと思います。

このことと関連して、前提的にもう少し付け加えますと、日本の場合、カルチュラル・スタディーズというのが佐藤毅⁴⁾ さんと児島和人⁵⁾ さんなどをとおし、主にコミュニケーション・スタディーズから入ってきましたので、カルチュラル・スタディーズといいますとアメリカ流のマス・メディア研究、受け手の効果分析というものを乗り越え、能動的受け手像といいますか、そういう点を提示したコミュニケーション研究として理解されることが多かったわけです。その意味でコミュニケーション研究の枠内で限定的に受容されてきたといえるわけですが、しかしながらそれは一つでして、もっと違う広大な部分があったわけです。そのことをここで説明したいと思います。さて、もう一つだけ付け加えさせてもらいたいのですが、最近カナダのブ

ランデル氏 (V. Blundell) らによって『リロケーティング、カルチュラル・スタディーズ』(Relocating Cultural Studies) という本がラウトレッジ社 (Routledge) から上梓されております⁶⁾。なかなか象徴的な表題ですが、カルチュラル・スタディーズと申しまして『思想』や『現代思想』を読まれた方はわかると思いますが、当初のブリティッシュなものとは、カルチュラル・スタディーズが国際化していくなかで随分変化が起こってきています。例えばポスト・コロナという問題や、よりエスニシティやジェンダーが強調されるようになります。またハバーマスとの関係で、公共圏の形成の有りようについてもこの中で議論されるようになってきています。こういうところでますますつかみ所がなくなっているのですが、スポーツ社会学の領域では、現在のところ当初のブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズが持っていた考え方や性格がいぜんとして中心になっており、新しく広がったところでは今一歩展開しきっておりませんので、今日の話もブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズを中心に述べていきたいと思います。

さて本題に入りますが、まずもってカルチュラル・スタディーズとは何かということです。先ほど多様な言説によって構成されているということを申しましたが、同時にそれは一つの理論に基づいたものではないということが出来ます。研究主題についても普遍的なものがあるわけでもなく、ある意味では日常世界から世界システムまで同時に語れるという性格を持っているわけです。そういう意味ではこの学派の理論内部でいくつも矛盾を抱えています。ただしそのことから、カルチュラル・スタディーズは現代社会を重層的にみてくうえで強みを持っている、強みを生み出している面があるわけです。吉見さんが『現代思想』の対談のところで述べられていますように、最近カルチュラル・スタディーズの「流行」に伴って、カルチュラル・スタディーズは文化現象についての、何かテキスト分析というようなものを行う、そういう理解が現れてきていますが、そういうものでもありま

せん。もっと全体社会の重層性を照らし出すような方向を持ったものと理解すべきものなのです。

それではカルチュラル・スタディーズとは何かということです。捉え方がいろいろあると思いますけれども、初期のところにはやはり中心となる点が見えるように思えます。そこでなにがポイントになっているかといえますと、一つは民衆、民衆文化というものを捉えていこうとすること。このことの強調だと思えます。二つ目は、「民衆」、もしくは「民衆文化」と支配文化の拮抗関係を捉えていくという、こういうところに焦点があったんだろうと思います。特にこれが当初の1950年代にできますが、先に触れましたブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズをつくっていった四人といわれる人たち、ホール以外の残りの三人として、リチャード・ホガード (Richard Hoggard)、レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams)、さらにエドワード・トムソン (E. P. Thompson) という人たちがあげられますが、この人たちが出発点でこのような方向で研究をすすめていきます。

ではなぜこのような研究が現れてきたかと言いますと、そこには50年代イギリスの社会、政治状況があるわけです。その出発点でこのような中心を生み出していった時代状況というのは何かと申しますと、一つは50年代、戦後イギリスの「豊かさ」のなかで現れた文化的な問題状況をあげることができると思います。戦後の豊かさのなかで一方ではマス・メディアが著しい展開を見せていく、他方大量生産が行われ、大衆文化がでてくるわけですが、このなかで伝統的な「階級文化」の基礎を掘り崩していくという状況が起こってきます。この危機感に対して左と右から文化理論が登場してくるわけですが、ここででてきた課題が研究の発端となってくるわけであります。もう一つ、特にこの時重要だったと思うのは、これは意外と触れられていませんが、1950～60年代のイギリス共産党の状況だったんだろうと思います。イギリス共産党というのは、やはりスターリン主義的な傾向を持っていた、明確にソ連追随路線をとり

ますので、ハンガリー動乱やソ連のチェコ侵攻を支持していくわけです。このことを契機にそこから多くの知識人が抜けていく、そして別様の運動をつくっていかうということがでてくるわけです。こういう流れとイギリスの50年代の社会状況というものがまさに結びあってカルチュラル・スタディーズが生まれてくる、こういうふうに見ていいんだろーと思います。ですからそこでは、民主的文化の形成というものと新しい社会主義の勢力の形成という、こういう二つの焦点が置かれるようになるわけです。そういう意味では、特に後者の流れからカルチュラル・スタディーズは、しばしばネオ・マルクス主義ともいわれていたわけです（当初、ウィリアムスの『長い革命』(The Long Revolution)⁷⁾などが翻訳された頃は「文化（主義）的マルクス主義」などとも日本で表記されていました）。ただし後で述べますように、例えば東京大学で行われたワークショップで、コリン・スパーク（Colin Spark）氏は、マルクス主義というのはむしろ後からでてきたんだということを言っています。重なったことはないんだ、ということもホール氏は言っていますが、当初よりカルチュラル・スタディーズにはスターリン的なマルクス主義の問題が強く意識されており、還元主義や決定論といわれますが、こういうものを運動論的にも、理論的にも克服していこうとします。そのためにはポピュリズム的言説、こちらの方をやはり中心として、それにコリン・スパーク氏も指摘していましたように、後からマルクス主義的なものが、これはやはり底流で引き続いてきた面も強かったと思いますが、被さってきた、と見ていいんじゃないかという気がします。これは私の見方です。

さて、そこでどういう方向で分析を行おうとしていったのでしょうか。このことを述べますと、一つ特徴的なのは、経験ということも含め、文化を民衆の全生活様式、a whole way of life とし、それを捉えていこうとしたことです。生活様式、広い意味での文化に着目していきます。生活様式というのは階級的経験として自己のアイデンティティーや価値、道徳、こう

いうのをつくっていく、また具現化するものとして取り上げていきます。その意味では、世界観を示すというようなもの、こういうふうに見ていく訳です。その中にある民衆文化の健全性とかその持っている社会的意味の重要性を主張していきます。ですからホガードなんかは、民衆の日常言語とか民謡とか雑誌とか大衆小説、こういうものを分析していくわけです⁸⁾。そこに民主的文化形成の可能性なんかを考えていくわけです。このような流れと重なりますが、他方こういう方向に対してエドワード・トムソン（Edward Thompson）、これは社会史のほうから登場するわけですが、それをよりマルクス主義的な文脈に置き換えていきます。ただし重要なのはホガード、ウィリアムズという先ほど述べた人たちも、支配・被支配階級の関係構造で捉えていくわけですが、トムソンの方はもっと民衆の方を見ていきます。民衆、民衆文化のなかにある、moral economy といいますが、その道徳的な価値規範を見いだしていき、一方でそこに支配文化が侵食してくる、しかしそこに多様な形態で抵抗が生まれてくる、そういうところを見ていこうとしたわけです。この脈絡でトムソンなんかは、暴動（Riot）なんかも抵抗としてその歴史的社会的位置を意味づけていきます。それを不合理な支配の正統化に対する抵抗として意味づけ、研究していくわけです。こういう研究はフランスのアナール学派のシャリバリの研究、こういう研究とかなり重なるわけですが、民衆のなかにある道徳規範的なものを非常に評価していきます。民衆は一方的に操作されていかないうけでして、民衆のなかに存在する moral economy、こういうものを前提にし、それを取り込む形でなければ実効的支配はできないわけです。したがって、当然それを取り込むなかで可視的であれ、不可視的であれ、また自覚を伴っていないにしろ摩擦や軋轢が生じます。しばしばそこでは拮抗関係というような状況が観察されるんですが、彼らはそういう拮抗関係のなかでイギリスの文化がつくられてきた歴史を見ていきます。しかしとりわけそこにおける民衆の歴史的な作用主体（agencies）と

しての意味や、その能動的側面を見ていこうとするわけであります⁹⁾。私はここのところがブリティッシュ・カルチュラル・スタディズのかなり根本になってくるんだらうと思います。そういう意味ではポピュリズム的な傾向が非常に強いという気がするわけです。このことはスポーツ社会学でイギリスのハーグリーブス (John Hargreaves) やカナダのリチャード・グルノウ (Richard Gruneau) の歴史社会学的なスポーツの分析にもかなり現れてきますし、また一連のフリーガン研究に受け継がれるわけです。いかにこの民衆のなかの能動性とか歴史的作用主体の位置とかいうものを見抜いていくかがそこで焦点となるわけですが、それが随分とイギリスの経験などを題材にしてでてくるのであります。またこういう見方というのは、また後ほど述べますが、グラムシにつながってくるんだらうと思います。

さてトムソン等はこういう見方をとるわけですが、このような見方はずっと受け継がれてくるのだと思います。話が少し前後してしまいますけれども、例えばスチュアート・ホールやD. モーレイ (D. Morley) などが、バーンシュタイン (B. Bernstein) などを介しながら、周知のようにエンコーディング・デコーディング・モデルと言うものをメディア研究の中心的コンセプトとして打ち出していきます。この中でもやはり中心になってきているのは能動的受け手像というようなものです。従って、こういうトムソン以来の傾向というものはやはり一本つながっていると見えるわけです。

さて、こういう傾向のことを文化主義、また時に文化主義的マルクス主義とかいわれてきたのですが、こういう文化主義というものはやはり構造的契機との接合がうまくいかないと非常に観念的なポピュリズムになっていきます。または経験主義的な研究というものに傾斜していつてしまうわけです。従って、ここに理論的フレームがやはり必要になってくるわけです。昨年菊先生とイギリスに行きました時に、エリアス学派の中心人物であるダニング (Eric Dunning)——彼もシンポジウムに参加していた

だく予定ですが——にたいして、カルチュラル・スタディーズとエリアス学派の両方の研究者を招待するといいましたところ、「おお、IdealistとSociologistか」といわれました。これはある程度カルチュラル・スタディーズに対する見方として非常に意味があると思います。と申しますのは、まさに民衆というものに期待をかける、しかしそのところを非構造的に捉える限りではIdealistという表現に当てはまるような状況に陥るからです。さてこの問題をカルチュラル・スタディーズはどう解決していくか、いったかと言うことです。

1964年に、バーミンガム大学で現代文化研究所 (The Center for Contemporary Cultural Studies), CCCS と通称されるものがつくられます。ここがカルチュラル・スタディーズの中心地となり、初代所長はホガードがつとめますが、二代目所長にスチュアート・ホールが就任して以降、ヨーロッパの社会理論を積極的に摂取していくようになります。フランクフルト学派・構造主義・記号論などを一生懸命摂取していきます。この中で、先ほどの問題と関わって、アルチュセールの構造主義というものがかなり強い影響を与え始めたわけです。ある意味で限定的に影響を与え始めたわけです。これは何かといいますと、文化主義では民衆の経験がイデオロギー的諸関係において支配的言説に絡め捉えていく、こういうことを把握できないわけですが、こういう問題が自覚化されてきたということではないかと思います。すなわちイデオロギー的支配の構造というものを、トムソンなんかのいつていた経験というものから、もっとそれを構造的に見ていかなくてはならないというような形になっていくわけです。やはり非構造的なポピュリズムの捉え方では、抵抗がなぜ階級支配の構造の回避にいかないのか、また民衆のなかで抵抗運動に参加しない層がいるというのは何なのか、という問題を解けないわけです。従って、その問題からやはり構造というもののとの接点を強く意識化して考えていったと理解していいのではないかと思います。アルチュセールの構造主義の影響はそのような文脈

のもとにあったわけです。

ただし、先ほどこのアルチュセールを導入していくのが限定的と申しましたけれども、アルチュセールは周知のように「国家イデオロギー装置」という形に持っていくわけです。で、これをホールは、京都の講演会でも相当いっていましたが、そういう一方的な支配様式、トップダウン方式、こういう捉え方はイカンのだ、ということを行っているわけです。こういうイデオロギー装置論に陥らないようにしなければならぬ。そこでさっきのポピュリズム的な捉え方と密接に結びついてくるんですが、一方でこのアルチュセールの構造主義のイデオロギー装置論を批判していく、フランクフルトの批判もやはり同じように行っていますが、他方では構造との接点を見ながら、同時にもっと民衆の能動性というものを、特にそこでの拮抗関係というものを見ていく、作用主体としての意味を接合していく、こういうふうに理論方向をとっていったわけです。

さてこのような流れを前提にして、カルチュラル・スタディーズはCCCSになってメディア・テキストと社会的意味の構造化の問題に取り組んでいきます。そういう研究がでてくるわけです。意味付与の政治学と言うべきでしょうか、メディアというものを意味付与のエージェントとして捉えますけれども、この言説空間におけるイデオロギー闘争が意味付与の政治学としておかれ、そしてメディア研究を進めていくという、ここに至るわけです。またこの意味付与の政治学ということと非常に関わってくるんですが、サブ・カルチャー研究が行われるわけです。特にこれはメディアと関わってきますが、文化的実践が社会的意味を獲得するその過程とメディアの関係を分析していきます。重要なのは、その過程の中で、特定の社会集団のサブ・カルチャー、特に支配的な文化のみならず、伝統的な成人労働者階級の文化や大衆的文化、こういうものから相対的に自立しているところを見ていこうとするわけです。ここで中心的に捉えていった特定の社会集団とは何かといいますと、若者文化です。その中でも注目したいのは

黒人とか、モッズとか、スキンヘッド、パンクとかそういうものを見ていくわけです。これもいわゆる民衆文化、ある意味で労働者文化だったんですが、それまでの労働者文化という範疇では捉え難いもの、そういうものも見ていくようになっていくわけです。そしてこの中の様々な言説による支配や拮抗・抵抗関係を見ていくわけです。この辺のところはヘブディジ(D. Hebdige)の『サブ・カルチャー』¹⁰⁾とかサイモン・フィリス(Simon Frith)が『サウンドの力：ロックの社会学』¹¹⁾というのを書いていますし、この時期の研究で最も鮮明にこの辺のことが現れてくるものとして、ポール・ウィリス(P. Willis)の*Learning to Labour*(邦訳『ハマータウンの野郎ども：学校への反抗、労働への順応』¹²⁾)がありますので参考にさせていただければと思いますが、こういうような流れになっていくわけです。

さてこのように、一方で構造主義的な傾斜を持つわけですが、これと先ほど言いましたように当初からのオリジナルな枠組み、ポピュリズムな枠組みというものがやはり受け継がれてきます。ある意味で連続と続くわけですし、それが他方で若者文化への着目、またそこでの意味付与の政治学という方向になっていったんであると思われる。この接合の様式が、やはりこのあたりでグラムシを中心的な位置に持ってくるというものにつながってきたんだろうと思います。したがってこのグラムシの取り込みというのは、二つの意味で重要な意義を持つわけです。それはポピュリズム的な理論枠組みを、ある意味でより構造的要素のなかに組み込んできます。そしてそのうえでヘゲモニーをめぐる闘争、この問題を見ていくようになるわけです。民衆文化のなかの抵抗の様式というものが、ここでヘゲモニーをめぐる闘争という形で構造との接点を強く持って入ってくるわけです。ヘゲモニーというのは、先ほどあげましたようなイデオロギー装置とかそういう一方的なトップダウン方式という考えではないわけです。ヘゲモニーというものが元々でてくる契機というのは、ある種の能動的主体像が想定され

ているわけでした、そうでなかったらヘゲモニーと言う概念は必要ないわけです。合意の調達、指導と合意というものの関係をめぐって争われていきますが、この前提としてある種の能動性を兼ね備えた主体像というのがやはりあるわけで、そういう意味では『スポーツ社会学研究』第4巻にも書きましたけれども、ヘゲモニー論と、元々ポピュリズム的なものとはかなり親和性を持っていたといえるのではないかと思います。それで、これが強い影響を持つようになるわけであります。

もう一つは、実はこここのところはいろいろな解釈ができるんですが、このヘゲモニー論、グラムシを入れてくるなかで多元的な主体というものを含めていくようになります。司会の伊藤先生といろいろお話ししますと「グラムシはいろんな解釈ができる、だから有効なんだ」と言うことを申されておりましたが¹³⁾、そういう要素はやはり大いにあるわけです。その意味でヘゲモニー論にも様々な考えが生じ得るのですが——この辺のところはハーグリーブスの著作でもいわれているところではありますが——、特に主体をどのように設定するかが大変重要な問題になります。ちょうどその問題は、『現代政治の理論と思想』という本のなかで、後房雄さんがグラムシについて書かれたなかででてきますが、彼はグラムシのなかに多元的な主体というものを含み得る要素があるんだということを言っております¹⁴⁾。また逆に早くからグラムシに取り組まれている竹村英輔さんは、違うんだと、これはやはりクラスというのが基軸になっている、それを揺るがしたらあかんだ、ということを主張しています¹⁵⁾。この問題はカルチュラル・スタディーズが構造とエイジェンシーの関係をどのように捉えたかという点で大変重要な論点となるのですが、ここでは多元的な主体というものを含めていく方向をとったという点だけ述べておきます。ジェンダーやレース、エスニシティ、などを含めたものになっていくわけです。簡単に申しますと、従来の階級というカテゴリーからさらに拡散したような多元的な主体が、多様な場面で、民衆文化を介して、

またその場でヘゲモニー闘争を起こし得る、起こしてくるという、この部分を見ていこうとする方向をとっていくわけです。で、これがでてくるのはなぜかといえますと、いくつか原因があってこれをしゃべり出すと大変長くなるんですが、ごく簡単に申せば、第一に戦後様々な形の権利の拡大がでてくること、そこで多様な主体が可視的に現れるようになったことがあげられると思います。労働組合が非常に強いですから、ある種社会民主主義的な権利の拡大が行われるようになります。他方でフォードイズムによる大量生産・大量消費というのが形成され、その結果消費領域を中心に様々な形で主体者・主権者というのが生成してくるわけです。また旧植民地からの移民者の定着化ということもあげられると思いますが、このようなことから階級というカテゴリーだけではもう代表し得ない、多様な主体が現れてくるわけです¹⁶⁾。このところにある限定のもとでいえば、グラムシ主義的なもの、またその多元的解釈を導入する必然性があったように思えます。階級と言うカテゴリーではもう包括できない、多元的な主体を想定したヘゲモニー論を構成する必要があります。第二に、これは時期を後にしますが、やはりサッチャリズムの影響があると思います。サッチャリズムというのは「権威主義的ポピュリズム」という形をとった支配様式と分析されているんですが、ここの問題をどう解決するかと言うところでやはり行き着いてきたんだろうというふうに思うわけです¹⁷⁾。つまり伝統的な階級という枠組みだけでは、ポピュラーを介在して現れる支配の編成の問題は解けない。そういう課題が現れたと思うわけです。

さてそういう意味では、カルチュラル・スタディーズというのはポピュリズムの伝統、これを持ちつつもグラムシによって再構成されていきます。ただし、二回の構造主義、一つは、スターリン主義的な教条主義的なマルクス主義という構造主義を乗り越えていきます。もう一つは、アルチュセール主義的構造主義というものを乗り越えていきます。この過程のなかでグラムシにたどり着き、同時に多元的主体を含み込んだ

かたちでそれを再編成してきた、というように私は理解しているわけです。

さてここからスポーツの問題に入っていきますが、このような経緯から、スポーツや身体文化の問題というのは、何々理論を使ってスポーツに見るというのではないわけです。もうスポーツというのは、カルチュラル・スタディズの主題そのものの一つとなり得るわけです。というのは英国の民衆文化のなかで、スポーツというものが従来にも増して重要なものになっていくからです。特にそれが現れてくるのは、イギリスの経験では1970年代の終わりぐらいからなわけですが、このような状況は何によってもたらされたものかといえ、やはりサッチャリズムが密接に関係してくるわけです。その前提としてサッチャー政権が誕生する前の労働党政権で、福祉国家政策の一環としてスポーツがサポートされるようになります。それで1973年に、スポーツ・カウンシル (Sports Council) が設立されるわけですが、この継続がサッチャリズムのなかでも行われます。ただしサッチャリズムの段階では、もっと社会統合的な意味を持ってくるわけです。失業率も高いなかで、1981年にロンドンで大騒乱、若者の暴動みたいなものが起こりますけれども、こういう状況に直面して、若者というものをどのように統合していくかということが切迫した課題として現れてくるわけです。スポーツはそのための重要な装置となっていくわけです。サッチャリズムのもとで、教育・福祉をはじめおおかたの公共予算が削減されていきますが、希有な例としてスポーツと軍事費は微増いたします。トムリンソンが、このことを自編著の *Sociology of Leisure* のなかで、なぜそうなのか考察せよという学生向けの問題として出しているのですが¹⁸⁾、スポーツやレクリエーションの問題は社会統合装置としての意味が決定的に増していき、そのもとで国家のサポートを受けていくようになるわけです。そのため青年失業者に対する教育センターなどでも、レクリエーションやスポーツが力を入れられるようになるわけです。他方でまた、サッチャーがある種リスペクタビリティな生活

という言説、ある種の回帰的な a way of life をイデオロギー的に提唱していきます。その中でもまた、19世紀の合理的娯楽の現代的再編みたいなものを打ち出してくるわけです。そこでもスポーツやレクリエーション、「レジャー」というのは非常に重要な主題になってくるわけです。もちろんそれ以前から、民衆文化の流れと関わって、カルチュラル・スタディズの方はクラーク (A. Clarke) などがスポーツやレジャーの研究も行っているわけですが¹⁹⁾、このような70年代後半以降の政治状況のもとで、より一層スポーツというものを意識的に取り扱う研究者が現れてくるわけです。この影響もあつてのことと思いますが、イギリスのスポーツ社会学研究の展開はちょうど80年代前後になると思いますが、それはカルチュラル・スタディズがスポーツの研究を展開していくのとちょうど重なりますから、スポーツ研究にカルチュラル・スタディズが強い影響力を持って80年前半くらいの頃に入ってくるわけです。その代表的な著作がジョン・ハーグリーブスの *Sport, Power and Culture* (『スポーツ、権力、文化』) でして²⁰⁾、彼は80年代に入ってからいろいろ論文を書いているのですが、これが1986年に著作としてまとめられてでてきます。そしてスチュアート・ホールがその序文を書くことになるわけです。

さて、このカルチュラル・スタディズの方からのスポーツ社会学的研究が、かなり展開されてくるのは、今申しましたように80年代に入ってからですが、この時点でカルチュラル・スタディズは、すでにグラムシ的なコンセプトが主流になっていましたので、ここでのスポーツ研究もアルチュセールの構造主義やフランクフルト学派の影響を受けたスポーツ研究に対する批判から出発するわけです。これはジェニファー・ハーグリーブスの著作を読みますと理解できるかと思います²¹⁾。また当初からグラムシ的展開がスポーツ研究の中心的なテーマになっていました。さてそれではどういうふうにはそれは理論構成されているかといいますと、先ほどのマンデルさんの講演でもやり玉に挙げら

れていましたが、その代表例はやはりハーグリーブスのなかに見ることができるわけです。ハーグリーブスは86年に主著の『スポーツ・権力・文化』を書いたわけですが、その理論構成がどうなっているのかを見ることが非常に重要なわけです。そこで言っていることは、一つはスポーツをポピュラー・カルチャーとして捉えていくんだということです。このことを大変強調するわけです。スポーツをレジャーの文脈からではなく、ポピュラー・カルチャーの文脈で捉えていきます。他方、大衆文化でもないし階級文化でもない捉え方をするということを言っているわけです。民衆のなかの文化というのが、民衆にとって世界観を形成していく、自分たちの経験というものを意味づけていく、または意味づけていくものをつくっていく、そういうものとして捉えるとハーグリーブスは位置づけていきますが、それゆえその民衆のなかに入ってくる文化というものが、きわめて強いヘゲモニー装置になってきます。ハーグリーブスはポピュラー・カルチャーは毛細管上の性質を持つんだ、ということを言っています。権力は毛細管上の性質を持ち浸透してくるという。そしてそのところで民衆の持っている moral economyや、民衆の持っている世界観なりですね、それとそこに浸透してくるものとの間に摩擦や軋轢がしばしば生じるわけですし、ヘゲモニー闘争が行われてくるわけですね。そしてそのところで様々な戦略が繰り広げられます。それを見ていくために、スポーツはポピュラー・カルチャーとして捉えなければならない (sport as a popular culture)、ということを言っているわけです。もう一つはこれと同じようなことを言っているわけですが、スポーツというのは単なるマニピレーションの問題じゃない、操作手段じゃないんだと。そう言ってしまったら統制に対して抵抗して、自らの文化としてスポーツを武器にする、そういう能力を無視することになってしまうのではないかというわけです。要するに、民衆文化のところにどういうふうな権力作用が入ってくるか、しかしそのところでは様々な闘争が起こっているという

ことを見なきゃならない。そしてそれは多様な戦略を伴いながら、回帰や抵抗や従属の再生産という現れ方をしていくわけですが、そういう複合的な過程である。そのようなものとしてこの過程を見ていかなければならないんだ、というわけです。例えばこれまでフランクフルト学派に影響された批判的スポーツ理論——ドイツのリガウアー (Bero Rigauer) などが代表的ですし²²⁾、またフランスのブローム (Jean-Marie Brohm) もそのように捉えているのですが²³⁾、彼らはスポーツというのは操作の手段になっている、そういう文化なんだということを言っているんですが、ハーグリーブスというのはそういう捉え方をあまりしないわけです。そうではなくて、スポーツの機能と意味というのは異なる文化で異なる役割を果たす、ということを言っているわけです。スポーツの社会的存在様式は、当該の社会状況と様々な主体のとり得る戦略によって複雑な過程があり得るわけで、それが民衆文化のなかで展開されていくんだと考えるわけです。そしてこの過程のなかで、様々な水準でヘゲモニー闘争が行われているのを見なければならぬ、というわけです。そういうふうなスポーツというものをある意味で両義的なものとして見ていくわけです。

もう一つ付け加えますと、マンデル夫妻の講演とも関係してきますが、ハーグリーブスはさらにこの本のなかで、スポーツのなかの遊戯的側面が重要だということも言っているわけです。このことはフランクフルト学派の影響を受けている、アメリカのスポーツ哲学者のモーガンも同じようなことを主張しているわけです²⁴⁾。モーガンはこの遊技的側面に立脚してヘゲモニー論を批判していますので、マンデル夫妻の講演には彼の影響もあるのかもしれませんが、さて、スポーツにはこのプレイ的側面というものがあります。ですから、支配・従属的権力関係以外に、ハーグリーブスはもうひとつ文化の固有性というものがあることを見るわけです。「楽しくなければテレビじゃない」ではないですけども、楽しさというものを介した形でなければスポーツは少なくとも大衆的に、また継続的には行われて

いきません。従ってそのところに、単純なディシプリン権力にならないスポーツ文化の固有性が存在するんであり、それゆえ一方的な操作手段にならないという根拠を見ていくわけです。そしてそのことを前提に、それを取り巻く権力関係、時々のヘゲモニー状況のなかの権力関係と、多様な戦略のなかでスポーツの社会的あり様が決まってくる、というように捉えていくわけです。類似した捉え方は、日本でも池上俊一氏など、最近の遊びの社会史的研究のなかに見ることができます²⁵⁾。そこで述べられているのは、中世世界で遊びが聖的世界の意味づけを失って世俗化していく。そこに教会や神学者が、たびたび警鐘を発したり禁止令を出していくんですが、いっこう止まらない。むしろ民衆側は聖的意味づけを外見的には装いながら、それを民衆の文法で読み替えていきます。その際、一方で遊びが世俗化していく原動力、遊びが自立化していく原動力を、都市を中心とした貨幣経済の展開やそのもとになる「資本主義的関係」の発生による労働行為概念の聖俗分割に見ていくわけですが、他方で聖的秩序を超出してしまふ遊びの持つ固有性を示唆するわけです。これは読み込み過ぎなのかもしれませんが、井上俊氏の「聖—俗—遊」パラダイムのなかの遊びの位置と重なるような気がいたします²⁶⁾。

さて話を戻し、簡単にまとめたいと思いますが、こういうカルチュラル・スタディズのスポーツ研究の考え方を非常にコンパクトにまとめたのが、1992年の北米スポーツ社会学会の機関誌、*Sociology of Sports Journal* に書かれた、ハーグリーブスとアラン・トムリンソンの論文です（これは『スポーツ社会学研究』4巻に紹介しておきました²⁷⁾）。

S.S.J では、British Cultural Studies and Sports Studies という特集号をくんでいます。同誌でマッカルンがブリティッシュ・カルチュラル・スタディズを批判した論文を書きます。これに対しハーグリーブスとアラン・トムリンソンが反批判という形で論文を書いており、そこに現在のカルチュラル・スタディズの立場が簡潔に書かれています²⁸⁾。そこで言っ

ていることは、今までの繰り返しになりますが、要するにスポーツを研究するに際して重要なのは、それを一方的な操作という形じゃなく、まさにヘゲモニー闘争が行われる場として見なければならぬんだということです。そしてその過程の中に能動的契機というものを見いだしていかなければならないのであり、それがやはりカルチュラル・スタディズの眼目なんであると述べています。そして、その分析には多様な主体というものをやはり設けていくんだといいます。というのは、マッカルンがカルチュラル・スタディズのスポーツ研究はやはり階級還元主義だと批判しているんですが、それに対してそうではなく、レースやジェンダーなど多様な主体を見ていくべきであると言っているわけです。こういう考えが、現在のカルチュラル・スタディズからのスポーツ研究であると言えることができると思います。

さて、残りの時間で日本の問題、カルチュラル・スタディズということではなに見えてくるか、ということを中心に簡単に見ていきたいと思います。こういうカルチュラル・スタディズを入れていくことで、私たちはなにが見えるんだろうかということです。このことは吉見さんの話とも非常に関わってくるわけですが、これに関して二つのことを言えるのではないかと思います。一つは、スポーツや身体に関わる権力関係を、民衆の能動性の発現という視点からどういうふうに見ていけるのだろうか、ということです。この視点をカルチュラル・スタディズは与えることができるのではなからうかと思うわけです。実際カナダのリチャード・グルノウ氏——この方もシンポジウムに来られるのですが——は、カナダのスポーツ史を分析するなかで、それをヘゲモニー闘争史としてかなり細かく追ってるわけですが²⁹⁾、日本のスポーツの歴史的経験についてこういう分析を行ったらどういことになるのか、ということです。例えば今まで、私たちのところでもスポーツ史あるいは体育史を中心に様々な形で権力テクノロジーの問題、イデオロギー装置の問題を取り扱ってきたわけです。例えば内務省衛生局以降の体力

政策の流れ、また学校体育のなかの兵式体操の導入などにみられるディシプリン権力の確立、また最終的には1938年の国民体力管理法というものにつながっていく、こういう身体に関わる権力テクノロジーの確立、またそれに関わるイデオロギーとして、近代スポーツの超克論、日本的体育道の形成の問題とか、そういうものが研究されていたわけですが、もっとそれを民衆の生活世界とか民衆文化との接点という点から描ききれないか、というふうに思うわけです。それで、この部分に吉見さんがやっている作業が一つ位置付くのではないかと思います。先ほど言いましたように、カルチュラル・スタディーズはポピュリズム的なところに研究の起点があると私は思うわけですが、その民衆の生活世界に権力というものが関わってきます。しかし日本においても、民衆の生活世界を単純に一方的に操作して支配構造をつくり出すことにはならないわけです。そこには様々な軋轢というのが生まれてきたり、民衆の側の読み替えや、また逆に従属の様式というものがでてくるわけですが、そこではやはり民衆の生活世界の持っている、あるmoral economyのようなものを取り入れていかなければやはり実効的な支配の構造にならないわけです。この辺の接点の部分を吉見先生は、「運動会」という場においての農民の持っていた祝祭空間の読み替えの問題を通して捉えていつているのではないかと思います。他方でそこに民衆の側の逆の読み替え——やはり祭りとしてしまう民衆の文法の存在を見るわけです。こういう分析が深められないだろうかと思うわけです。最近スポーツ史の方でも、このような研究が蓄積され始めていますし³⁰⁾、また同じような方向のものとしては、筑波大学の清水さんがやっている、池田町というローカルなコンテキストをふまえた甲子園野球の分析をあげることができるのではないかと思います³¹⁾。そこでは民衆の生活世界というものの、池田町という小宇宙のなかのコンテキストのなかで伝承されてる文法と絡めながら甲子園というものを捉えています。こういうものを見ることができないだろうかと思うわけです。

さて他方でこういう研究が、また現代スポーツのよりマクロな分析のところでもできないかと思うわけです。きわめて簡単に申しますと、要するに現代のスポーツをめぐって生じている軋轢は何なんだろうか、それをどう捉えられるのであろうかということです。例えば今度国際シンポジウムに來ます、ブルデュー門下のドゥフフランス、ポシェロといった研究者は、今のスポーツの変化をとらえるに際して、ディシプリンのなものから、もっとプレジャラブル(pleasurable)なものに変わってきているという点に着目しています。スポーツ連盟的なスポーツ、学校体育的なスポーツ、そこで形成されてきた正統性が揺らいで、もっと違うものに変わってきている。その変化を構成する基軸原理として、彼らはプレジャラブルというものをしています³²⁾。現在生じつつあるこのような変化に私も注目したいと思います。私は今、あるスーパーマーケットの研究を行っています。そこではやはりレジャーと言うものが非常に重要な消費商品になってきています。で、そこでは時間消費ビジネスといいますが、まさにそのプレジャラブルというものをいくつか分節化して、それをまた節合し、これをセットで販売ルートに乗せていきます。例えば横浜にそのスーパーマーケットが大きな町をつくっていますが、そこではプールも映画館もいくつも置かれていますし、またショッピングセンターもあります。顧客はそこで回遊しながら時間消費していきます。物販も単なるモノの販売にとどまらずに、こういう戦略に変わってきているわけで、マーケティングもタイム・シェアリングを重視するようになってきています。その中ではスポーツとか、身体にまつわる様々な文化が、いろいろなものと分節化されながら再節合され、セットされていきます。このセットの様式のありようを見ていくことが非常に重要なんじゃないかと思います。このような捉え方、Articulation(分節—節合)のあり様を捉えていくことは、実は今日のプリティシユ・カルチュラル・スタディーズでも強調されていて、ジュニア・スラックなどはこれはカルチュラル・

スタディズの中心的コンセプトなどとも申しておりますし³³⁾、アメリカの研究でも歌手のマドンナについて、このアーティキュレーションを軸に分析しています。ここで詳しくは申しませんが、このアーティキュレーションという捉え方をすることによって、一方で支配的言説の多元性やその重層的あらわれを分析し得るのでしょうし、同時にそのことはポピュリズムというものの多元性と資本主義というものとを結びつけていくことを可能にするのだと思います。構造との結びつきを考えていくなかでカルチュラル・スタディズが必然的に行き着いた一つの解決だと私は思います。この辺の考え方はラクロウの『資本主義、ファシズム、ポピュリズム』³⁴⁾ などを読んでいただければ理解できるかと思います。スチュアート・ホールもこの考えをラクロウから持ってきているようです。

さて話を戻しますと、一方は先ほどいいましたように時間消費ビジネスとしてセットしてきます。しかし他方もう一方で現れてきているのは、こういう消費的な分節－節合の権力作用に対してもっと違う形の分節－節合化が現れてきています。それはどういう分節－節合化かというと、こういう消費の方向としばしば同盟は結びますが必ずしもそれに取り込まれず、自分たちの意味世界と様々な文化とを日常の世界のなかで密接に結びつけ、セットして分節－節合していく。こういう別様のプレジャブルのセットがでてきてるわけです。その中には意味変換する作業というのが含まれているように思えます。実はスポーツのなかで現れている新しい動きというのは、先ほど言いました民衆的なものからの視点から見ていった場合、こういう消費権力的なセットの様式と、逆にそれを民衆が読み替えていたり、ある面を自己で創り上げていって、意味を自己の日常に結びつけてセットしなおしていくという、こういうものに対抗関係がでてきているんじゃないかという気がするわけです。先のドゥフランスの言葉を借りれば、スポーツの正統性をめぐって従来のスポーツ連盟的正統性、学校教育の側からの正統性と、今日消費権力の側、市民的な動きの側か

らの正統性をめぐる摩擦や軋轢、しばしば同盟も含みながらヘゲモニー闘争が現れつつあるのではないかと。こういうものを見れるのではないかと。もちろんこの中には多様な主体が入ってきます。例えば後者の領域では、従来の正統性との軋轢のなかでマスキュリティー神話を打ち壊していったり、ジェンダー的な動きが随分とでてきて、そこに従来の正統性に対抗する消費権力と民衆の意味世界とのある種の同盟が結ばれたりしています。このような動きには、グローバル化の与える影響やそれと関わった国民国家の枠組みの揺らぎが大きいかもしれませんが、このような正統性の揺らぎ、逆に言えば支配様式の再編と言えるのかもしれませんが、このなかで文化が変化してきています。その中で他方では自分たちの生活世界に引きつけ、スポーツの場を再構成していく動きが現れてきているのではないかと。こういう非常に重要な局面を現在の変化は持っているのではないかと思います。一つ例を付け加えますと、例えばアウト・ドア志向のなかに独特の新しいコミュニケーション様式がつけられてきているように見えます。そしてそれは、自然との共生運動に移ったりしてくるわけですが、私はここにある種の公共圏の生成が見れないかと思うわけです。カルチュラル・スタディズの方から、こういう現代の民衆の持っている読み替え、消費権力に一方的に組み込まれていないその読み替えの局面や、その新しい分節－節合の様式というもの、またそれをとおしたローカルな公共圏の生成が一つ見えてくるんじゃないかと思うわけです。

さて、最後にもう一つだけ言っておきたいことがあります。これまでの話と関連していますし、また現在のカルチュラル・スタディズはこの辺をきわめて重要なものとして焦点づけてきておりますが、もう一つ考えなければいけないのは、先ほど日本の身体のディシプリンの権力のあり様というものに言及いたしましたが、流動化し、またそのような伝統的な権力の存在様式と異なったものが現れてきているなかで、もっと私たちはこの中でパワーのセンターとペ

リフェラルという問題を併せて考えていかなければならないということです。これはいろんな場面や様式で考えられます。例えば私の住んでいます関西地域は、特に在日コリアンの人たちが非常に多いわけですが、こういう人々を主体像として設定してきたんだろうか、という問題もその一つです。スポーツや身体の問題とか全部そうですね。そういうところは今までの研究でどうだったのだろうかということです。様々な問題が考えられてくるわけです。こういうパワーのセンターとペリフェラルな関係のなかで、いかに権力が作用していき、そこにどういう能動的契機が生成しているのか。こういうものをカルチュラル・スタディーズが多様な膨らみを持ちながら見ていけるのではないかという気がするわけです。さて最後にまとめますと、要するにどのように民衆の地平から見ていくかという、このところが私は非常につかみ所になってきているのではないかと思います。このところからもう一回スポーツ社会学の研究を再構成できますし、今現れている様々な動きというものを見抜いていけるんじゃないかという、そんな気がするわけです。

注

- 1) 『思想：カルチュラル・スタディーズ——新しい文化批判のために』No.8591, 岩波書店, 1996.
- 2) 『現代思想：特集カルチュラル・スタディーズ』Vol.24-3, 青土社, 1996.
- 3) このほかカルチュラル・スタディーズの概要を知るためには次の文献が参考となる。本稿も多くを負っている。鮫島京一「プリティシユ・カルチュラル・スタディーズの射程(上)——『文化的支配』をめぐる諸問題」『立命館産業社会論集』第31巻第4号, 1996, ジョン・ホーン, 山下高行訳「プリティシユ・カルチュラル・スタディーズとスポーツ・レジャー研究」清野正義, D.Jary他編著『スポーツ・レジャー社会学；オールタナティブの現在』道と書院, 1996.
- 4) 佐藤毅『マスコミの受容理論』法政大学出版局, 1990, 『日本のメディアと社会心理』新曜社, 1995.
- 5) 児島和人『マス・コミュニケーション受容理論の展開』東京大学出版会, 1993.
- 6) V. Blundell, John Shepherd and Ian Taylor (eds.), *Relocating Cultural Studies: Developments in Theory and Research*, Routledge, 1993.
- 7) レイモンド・ウィリアムズ, 若松繁信, 妹尾剛光, 長谷川光昭訳『長い革命』ミネルヴァ書房, 1983 (Raymond Williams, *The Long Revolution*, Chatto and Windus, 1961).
- 8) リチャード・ホガート, 香山三郎訳『読み書き能力の効用』晶文社, 1974 (Richard Hoggart, *The Use of Literacy*, Chatto & Windus, 1957).
- 9) 次のものを参照されたい。
ハーヴェイ・J. ケイ, 桜井清監訳『イギリスのマルクス主義歴史家たち』白桃書房, 1989, 近藤和彦, 野村達朗編訳『歴史家たち』名古屋大学出版会, 1990, 松村高夫「イギリスの『文化的マルクス主義』」江口栄一, 相沢与一編『現代の生活と「社会化」』労働旬報社, 1986, 安川悦子「イギリスにおける階級闘争史研究」林基監修・階級闘争史研究会編『階級闘争の歴史と理論』青木書店, 1981, また近藤和彦『民のモラル：近世イギリスの分化と社会』山川出版, 1993 など。
- 10) D. Hebdige, *Subculture: The Meaning of Style*, Methuen, 1979 (山口俊子訳『サブカルチャー：スタイルの意味するもの』未来社, 1993).
- 11) サイモン・フリス, 細川周平, 竹田賢一訳『サウンドの力；若者・余暇・ロックの政治学』晶文社, 1991 (Simon Frith, *Sound Effects: Youth, Leisure and the Politics of Rock'n Roll*, Constable, 1983).
- 12) ポール・ウィリス, 熊沢誠他訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房, 1985, (P. Willis, *Learning to Labour*, Saxon House, 1977).
- 13) 伊藤公雄「グラムシと文化支配の現在」片桐薫, 黒沢惟昭編『グラムシと現代世界』社会評論社, 1993, 及び伊藤公雄「権力と対抗文化——ヘゲモニー論の射程」井上 俊他編『権力と支配の社会学』岩波書店, 1996.
- 14) 後房雄「A. グラムシと民主主義的ヘゲモニー実践」田口富久治・中谷義和編『現代政治の理論と思想』青木書店, 1994.
- 15) 竹村英輔「グラムシ研究と現代」『文化評論』No.323, 1982.
- 16) 拙稿「ポスト・フォーディズムのもとでのスポーツ・レジャー；ゲルノウ・ヘゲモニー論と日本社会」清野正義, D.Jary他編著『スポーツ・レジャー社会学；オールタナティブの現在』道と書院,

- 1996, 参照.
- 17) A. ギャンブル, 小笠原欣幸訳『自由経済と強い国家』みすず書房, 1990 (Andrew Gamble, *The Free Economy and the Strong State: The Politics of Thatcherism*, Macmillan, 1988).
 - 18) C. Critcher, P. Bramham and A. Tomlinson, *Sociology of Leisure: A Reader*, E & FN Spon, 1995.
 - 19) 例えば, A. Clarke, "Football and Working-Class Fans: Tradition and Change", R. Ingham, (ed.) *Football Hooliganism*, Interaction Imprint, 1978.
 - 20) J. ハーグリーブス『スポーツ・権力・文化——英国民衆スポーツの社会学』(John Hargreaves, *Sport Power and Culture*, Polity Press, 1986).
 - 21) Jeniffer Hargreaves (ed.), *Sport, Culture and Ideology*, Routledge & Kegan Paul, 1982.
 - 22) Bero Regauer, tr. by Allen Guttmann, *Sport and Work*, Columbia Univ. Press, 1981.
 - 23) Jean-Marie Brohm, tr. by Ian Fraser, *Sport: A Prison of Measured Time*, Pluto press, 1978.
 - 24) William J. Morgan, "Radical Social Theory of Sport: A Critique and a Conceptual Emendation" *S. S. J* Vol. 2, 1985, またこの辺の議論については拙稿「スポーツ社会学における再生産と生産の視角」体育・スポーツ社会学研究会編『体育・スポーツ社会学研究10, 新しい体育・スポーツ社会学をめざして』道と書院, 1991.
 - 25) 池上俊一『賭博・暴力・社交: 遊びから見る中世ヨーロッパ』講談社 1994.
 - 26) 井上俊「価値と制度——聖—俗理論をめぐって——」『社会学講座2, 社会学理論』東京大学出版会, 1975.
 - 27) 山下高行, 菊幸一「ヨーロッパスポーツ社会学の動向と1997年国際シンポジウム」『スポーツ社会学研究』4巻, 法政大学出版局, 1996.
 - 28) MacLoon, "The Ethnographic Imperative in Comparative Olympic Research". Alan Tomlinson & John Hargreaves, "Getting There: Cultural Theory and the Sociological Analysis of Sport in Britain" *S.S.J.*, Vol. 9, No. 2, 1992.
 - 29) Richard Gruneau, *Class, Sports and Social Development*, The Univ of Massachusetts Press, 1983, 注 (16) 拙稿も参照されたい。
 - 30) 高津勝『日本近代史の底流』創文企画, 1994.
 - 31) 清水諭「甲子園野球の神話分析—記号学からテキスト分析へ—」『体育・スポーツ社会学研究8, スポーツの社会的意味をさぐる』道と書院, 1989.
 - 32) ジャック・ドゥフランス, クリスチャン・ポシエロ, 山下高行訳「フランスにおけるスポーツの場の構造と展開 (1960—1990) —「機能的」, 歴史的, 予測的分析試論—」『立命館大学産業社会論集』第32巻4号 (予定), (Jacques Defrance & Christian Pociello "Structure and Evolution of the Field of Sports in France (1960-1990)" *I.R.S.S.*, Vol. 28, No. 1, 1993.
 - 33) Jennifer Daryl Slack, "The theory and method of articulation in cultural studies", Edited by Lawrence Grossberg "On postmodernism and articulation: an interview with Stuart Hall", David Morley and Kuan-Hsing Chen (eds.), *Stuart Hall: Critical dialogues in cultural studies*, Routledge, 1996.
 - 34) エルンスト・ラクロウ, 横越英一監訳『資本主義・ファシズム・ポピュリズム』大村書店, 1985.

エリアス派スポーツ社会学と身体／Body

1. わが国におけるエリアスの取り上げられ方とその身体論が意味するもの

近年といってもわずかここ2～3年で, わが国ではエリアスの所論をまともにとり上げながら, 身体論, 近代化論, スポーツ論などを展開する文献が散見できるようになってきました。例えば, 田中義久編著『関係の社会学』¹⁾, 三浦雅士『身体の零度』²⁾, 多木浩二『スポーツ

を考える』³⁾, 亀山佳明「スポーツの現代化と身体性の社会学」⁴⁾などが, その好例として上げられます。いずれも直接, 間接にはありますが, エリアスの愛弟子であるダニングの研究も含めてエリアス派社会学, あるいはエリアス派スポーツ社会学の視点を通じて, ますます複雑化, 錯綜化する近・現代社会を読み解くカギとしての身体に着目し, あるいはそこでの近代スポーツの意味を汲み取ろうとしています。

ここでは、もちろんここに掲げたすべての所論を検討することが目的ではありませんし、またその必要もありませんけれども、エリアスの身体論の取り上げ方、あるいはそこから必然的に発展させられるべき近代スポーツ論への射程について、現在わが国の先行研究がどの程度その内容を汲み取り、どのような方向性を持つようとしているのかについては、若干検討しておく必要があると思われます。

例えば、三浦雅士⁵⁾は、マナーとは身体の問題に他ならないとし、エリアスが提示した「宮廷社会」においてはこれまで何も不快に感じられなかった身体所作が不快に感じられ、恥じらいを覚える対象となり、さらにはそれがヨーロッパ全土にまで拡大していく過程をエリアスに倣い、「文明化の過程」と呼びます。また、それは他者と自己を隔てる身体的、心理的距離(壁)が拡大し、少なくとも理念的レベルでは、他者関係において「零度」の状態であった身体が自己抑制を強いられ、例えば密着してくる他者にはほとんど生理的に嫌悪感を覚えるほどまでに「孤立した自己」として、まさにそのようなものとして「近代的自我」を発展させたと言えます。近代社会の成立の基盤には、まさしくこのような「近代的自我」が必要であり、そのためには「間身体」に身体レベルまで必然的な不快感を伴う他者との「壁」が前提として発達しなければならなかったというわけです。

このようにエリアスの身体論は、ここでは明らかに「何が近代を成立させたのか」という三浦の問いに対して、表層的にはマナーやエチケットの発達と呼ばれる一見取るに足らない現象における身体所作の変化を文明化の過程として読み替えることによって、近代的自我の前提となる他者の身体と壁を作る自己の身体(=近代的自我としての身体)の確立に応用されていると言えるでしょう。しかも、その確立の内実は、身体と身体との関係に現れる「恥ずかしさ」「嫌悪感」「決まりの悪さ」といった極めて感情的、情緒的レベルの自動的な、オートマチックなまでの自然発生的な「壁」として認識されるものです。したがって、ここでは他者の

身体と自己の身体との区別(distinction)、乖離、距離化と近代的自我の確立との関係が、エリアスの身体論の内実として述べられていることになります。

次に、多木浩二⁶⁾は、「近代スポーツがなぜイギリスで発生したのか」という問いをエリアスの近代スポーツ論をもとに論証しています。ここでの取り上げ方は、エリアスの身体論をベースにしながら、(近代)スポーツ論へ移行しています。このプロセスは、まさにエリアスが、1939年に『文明化の過程』を初めて上梓し、その後の長い沈黙を経て彼の愛弟子であるダニングを従えて精力的に近代スポーツの諸問題、とりわけその発生にかかわる歴史社会学を展開していく過程に類似しています⁷⁾。多木は、エリアスが暴力論の次元で、近代スポーツの起源とイギリスにおける政治権力間の対立解決法を関係づけて論じていることに着目します。すなわち、政治的な争いであっても決して身体的な暴力にその解決法を委ねるのではなく、議論によって、あるいはその結果としての多数決によって決着を付けていくという方法、すなわち議会主義化(議会制度化)という現象が、身体の暴力的行使への欲望を抑制することによって、互いの信頼を獲得するという長期的変化を生じさせることに注目するわけです。ジェントリー層を中心とする上流階級のこのような身体抑制の習慣化は、彼らのあらゆる生活部分における身体暴力行使の抑制の習慣化へと容易に結びついていきます。そして、これとの関係で同時発生的に、少なくとも、これまで荒々しい暴力的形式を伴う前近代的スポーツは、非暴力的な近代スポーツへと徐々に変容させられていくということになります。

しかし、ここで重要なのは、エリアスが「議会主義化現象から近代スポーツ化現象へ」といった従来の機能的因果関係から脱却して、それがあくまで身体暴力行使の抑制というマナーの発達によって同時代的、かつ同質的にさまざまな集团的、階級的、社会的現象として現れたという「社会発生的」見方をとっている点にあります。多木は、このような意味から、エ

図1 相互依存する諸個人の関係構造⁹⁾

リアス同様、逆に「スポーツを問うことは社会を問うことである」として、現代社会に見られるスポーツの現状を歴史社会学的に徹底的に差異化することによって、現代社会の病理をラディカルに問い直そうとしているのです。しかし、ここで彼は、確かに現代スポーツを徹底的に解釈しているものの、エリアスの近代スポーツ論の限界も同時に示し、それが現代スポーツ論へ批判的に継承されるには限界があることを明らかにしています。

さて、三浦、多木のエリアスの取り上げ方は、その身体論、スポーツ論双方において各々の論の素材としては、総じて的確な解釈がなされており、それぞれの目的を達成する手段として有効に機能しているように思われます。しかし、三浦においては、当然のことながらスポーツ論への展開はみられず、あくまで身体論にとどまっています。また、多木においては、近代スポーツの発生それ自体の説明の有効性としてエリアスの理論が限定的に使用されているものの、その非暴力化へのプロセスが現代スポーツの解釈に発展的に生かされることを断念しています。むしろ、この点でもう一度エリアスの身体論にさかのぼり、「文明化された身体」の向

こう側に現代スポーツの社会学を論じる視点をエリアス派スポーツ社会学の理論的可能性として探求する必要があるように思われます。

2. エリアス派社会学の方法論的基礎

ここで、フィギュレーション社会学、過程社会学、「文明化の過程理論」に基づく社会学などさまざまな呼称のあるエリアス派社会学の方法論的基礎について、若干の説明を加えておきたいと思います⁹⁾。

まず、その特徴の第1は、徹底した認識論的、存在論的、科学論的二元論を批判し、すべての事象は動的でダイナミックに変化しており、社会のあらゆる局面はダイナミックな相互依存、相互保持と相互補強の関係の網の目（＝フィギュレーション）によって成立していると考えるところにあります（図1参照）。そのため、諸個人は常に他者に対して開かれた存在、すなわち身体、情緒、言語なるものの「関係性」を保持し得なければ社会を構成し得ないし、社会もまたそのような諸個人を前提としなければ成立し得ない。ここに、[社会—個人]を全体とその部分として対立的、対比的に認識す

ることは意味をなさなくなり、徹底的な関係概念の中でダイナミックな権力関係の諸相がとらえられることになります。

したがって、ここでの「権力」は絶対的な意味で奪ったり、所有したりできる「もの」として具象化してとらえられるのではなく、極めて多形的、多面的性格を有することになります。われわれは他者に依存し、他者はわれわれに依存する関係性によって布置されるわけですから、他者のわれわれに対する権力は、その関係性が身体、情緒、言語の何であれ、他者への依存の程度が強まれば強まるほど増大していきます。しかし、エリアスは、フーコーと同様、とりわけ「身体」の権力関係にまず視点の中心を置き、身体的なるものの発現の偏在（かたより）やそれを通した身体的、情緒的な自己規律化の歴史の変遷と社会行動の変化とを明確に関連づけようとしたと言えます。この点が、後ほど述べますカルチュラル・スタディーズとの理論的出発点の違いとなって現われてくるように思われます。

したがって、先に特徴の第1として述べました伝統的な社会科学における方法論的認識の二元論に対する鋭い解体作業は、あらゆる事象の過程（プロセス）を社会発生的なフィギュレーションの全体像として論述していく具体的な用語（terminology）を必要とすることになります。すなわち、エリアス派社会学は他の伝統的な社会学者たちが「政治」について好んで語るとき、「党派の成立」について語りますし、同じく「経済領域」のことより「経済的専門家」のことを、「抑圧的な国家機構」のことより暴力を規制する「社会的専門家」のことを、「イデオロギイ的实践」のことより「指向（orientation）の方法」についてそれぞれ語るのである¹⁰⁾。ここに、関係としての身体を媒介とする「文明化の過程」という1つの用語、概念が形成されることになります。

「文明化の過程」とは、これまでわれわれが経験的に用いている「文明」の概念、すなわち伝統的に、社会の経済的、道德的、政治的進化の階層を序列化したり、記述したりする方法とし

て、評価的文脈で用いられるそれとは異なる概念に基づいています。それは、基本的には、社会における内面的な鎮圧の程度、すなわち習慣の洗練化、社会関係に含まれる自己抑制や自己反省の増大、社会的成長の経験などを含む一連の過程としてとらえられます。したがって、「文明化された」個人と社会について述べる場合、その言葉は、先に述べたような経験的な意味での「文明化」、すなわち静的な業績の達成を示すものとして用いられません。「文明化された」という言葉は、常に「関係的」であり、比較の意味を提供する一方で、常に変化が進行していることを意味します。文明化の過程には、始まりもなければ、終りもありません¹¹⁾。同じことは、文明化された身体的发展についても言えることになります。

このような「文明化の過程」に関する概念は、その価値判断を周到に回避する対象との距離化、分離（detachment）を方法論的特徴として持つことになりますが、この概念の使用とその意味するものが後に述べるカルチュラル・スタディーズとの方法論的論争の焦点ともなっています¹²⁾。少なくともここでは、エリアスが用いる「文明化の過程」の概念が、文明化の善し悪し、適・不適、上・下などを判断することを一切含んでおらず、むしろそれは関係の網の目の中で流動化する人間が、全体として、意図せざる結果として向かわざるを得なかった1つの方向性であり、社会的諸現象がそれに基づいて創発的、社会発生的に起きていることを説明する1つの名目的定義なのだということを理解していただければよいのではないかと思います。

3. エリアス派社会学の身体論の射程 ーエリアス派スポーツ社会学への基礎ー

さて、ここで先に三浦の身体論に応用されたエリアスの身体へのまなざしを彼の著書である『文明化の過程』および『宮廷社会』の論旨に沿いながら、社会学的に解説し、なぜスポーツなのかについて基礎的な議論を展開してみたいと思います¹³⁾。

まず、身体のマナーやエチケット——例えば、食事、排泄、つばや鼻汁の処理、寝室などでの作法——の洗練化は、本来医学的な正当性、すなわち科学的に論証された衛生思想の下でその変化が起きたわけではなく、それ以前に洗練化がすでに起きていたという事実があります¹⁴⁾。エリアスは、このような身体操作の変化の要因を全体的に2つのシステムテックな要因、すなわち一方で労働の社会的分業の増大、進行と、他方で効果的な暴力の独占機構の整備が国民国家(nation states)のレベルで相互に関連、依存し合う現象の1つとしてみられることに求めると同時に、それに先立つ基礎的レベルでの1つの「局所的(特定の場に集中する)」要因、すなわち他との「区別(distinction)への探求」が、身体操作の歴史に重大な結果をもたらしたと考えます。ここで重要な身体の論議は、まず後者の局所的要因が意味する身体の社会学に向けられ、その後、前者のマクロな展開過程の中で近代スポーツの発生が取り上げられることになります。

さて、後者に関連したこれらの変化の主な局所的要因というのは、行動のコード(様式)の内面化を促進した宮廷社会の個々人への「区別への探求」に向けられました。中世において、自由騎士はほとんど下から彼らの社会的地位を脅かされる心配はありませんでした。彼らは身体の暴力的行為を駆使して戦い、傷つけ合い、その敵対する脅威の不安を取り除こうとしました。したがって、その結果、下層階級と似ている粗野な行動を修正しようとするような心理的圧力はほとんどありませんでしたし、そのことを感じる必要もなかったわけです。しかし、宮廷社会の発展、すなわち自由騎士や田舎の土地所有階級が宮廷人化すると、この状況が変化していきます。宮廷社会内部の人々の地位は、まず第1に家柄と公的な称号でランクづけされていましたが、宮廷人が王とともに楽しんだ「えこひいき」によってこのヒエラルキーの幅が広げられ、変更させられることが生じたのです。エリアスは、このことについて次のように述べています。

「ひとりの人間がその時その時に宮廷序列内で占める位置は、極めて不安定だったのである。誰かが現実的に勢力を得ると、どうしても公的位階も高めたいという欲求を持つことになった。そのようにして誰かが上昇することは、必然的に他の者が不利になることを意味した。それ故、そのような欲求が導火線になって闘いの火蓋が切られるのであるが、それは国王のために行う戦争行為を除けば、宮廷貴族にとってなお唯一の可能な種類の闘い、つまり、宮廷序列内における地位をめぐる闘争であった」¹⁵⁾

すなわち、このような宮廷内部で繰り広げられた地位闘争に絡む区別への永続的探求が、身体操作に対する要求を大きくするとともに、その基準は王の「えこひいき」「感覚」に基づく他者との区別におかれているので常に不安定な状況の下に置かれることになりました。しかし、少なくとも相互了解的な意味で「悪いマナー」を示すことは、不快なものとしてみられ、無礼な人としての汚名をきせられ、人々の行動に強制的な影響を及ぼす行動のコードをもたらし、それを強化していくことになります。もちろん、このような文脈において、感情の爆発は、人間の本当の感情をあらわにし、コントロールの喪失を意味することから、体面を損なう結果になりました。結局、このような宮廷生活における地位の闘争は、人間を扱う際に、計算された、上品に隠された行動に向けて、感情の抑制を強要するようになります。

その結果、他人から面子を失う恐怖は、個人の中に限定された行動の習慣の再生産やそれを基礎とする厳しい衝動の抑制を徐々に染み込ませていくプロセスを生じさせます。また、高い地位と威信的なパーソナリティの性格を守ることは、洞察力、自己抑制、不安によってつきまといわれる慎重さを必要とすることが常態化してくるようになります。

したがって、このような状況の結果として、身体操作の規範は、個人に「内面化」されるようになるわけです。外部から押しつけられる代わりに、制裁の恐怖を通して、行動のコード

は、他者の存在の有無に構わず潜在意識のレベルがある種の感情（嫌悪感、決まりの悪さ、気恥ずかしさ）を伴って徐々に適用されるようになるわけです（このような状況は、今日でもいまだに関連する事例がいくつでもあります——例えば、人々は、たとえ自分が他人から見られることのない自宅で日中を過ごす場合でも、いつも衣服を身にまとうというように、それが半ば絶対性を帯びた常識化された行動のコードとなっています）。

結局のところ、認識、報酬、地位に対する宮廷社会における「下」からの継続的な圧力と「上」に引き起こされるこの競争の恐怖は、上流階級が他の階級と自分達を区別することによって特定の文明化された上品さを求める最も強い力になるということを示しています。すなわち、ここに身体を媒介（メディア）とする身分的対照（コントラスト）の縮小と変種の増大（マナーの生産）が行われることになるわけですから¹⁶⁾。

それでは、そこで展開される身分的対照（コントラスト）の縮小に基づく歴史的な競争形態にはどのようなものが考えられるのでしょうか。

歴史的には、地位の競争は主に2つの形態を示すことになります¹⁷⁾。第1には、下層階級のメンバーが上流階級を模倣し、個人的な社会的上昇が必要とする多大な努力を示す行動の痕跡を残そうとする個人的な社会的移動の試みによって特徴づけられます。すなわち、すでに価値づけられた身体操作の形式に向けて、もっとも模範となる内面的努力とその結果としてのパフォーマンスを希求する装置（身体的感受性の基準を絶対値としてそれを強化していく方向）を発展させるというわけです。第2は、下層集団の社会的権力が上層集団を犠牲にして上昇し、集団が自らの違いを際立たせ、優秀性のモデルとして自らをそれぞれ主張していく傾向です。ここに身体の文化的様式としての多様化、変種の増大（多様な興奮の探求の許容と解放的な身体を多様化させていく方向）がみられるわけです。この場合、宮廷社会内部の区別への探

求は、とりあえず行動のコードの内面化に向けて、身体の監視やコントロールといった配慮を増大させていく第1の方向をとる傾向にありました。そして、このような行動規範の内面化をもたらした宮廷内の競争は、つぎのような3つの意図せざる結果を招くこととなりました。

① 人々の間で、相互依存的なアイデンティティ（mutual identification）が増加したということ。『宮廷社会』でエリアスが論証したように、競争状態で自分の社会的地位を上昇させたり、守ろうとしたりする場合、より一層人々の「心理的」な見方が必要であり、それは自分と他者の行動や表現に対する正確な観察を伴うものでした。自分の行動が他者からどのように見られているかにより多くの配慮をすることは、より質の高い他者とのアイデンティティを構成するものと考えられます。このことが意味する1つの事柄は、相互依存のアイデンティティが他者との共鳴や感情移入の促進を導くということです。このような相互依存のアイデンティティのプロセスに伴って、気恥ずかしさや決まりの悪さといった感情の限界値がより低く設定されることになります。それは、自分の感情をコントロールできないときや内面化された行動のコードから逸脱したときに感じる気恥ずかしさ、あるいは他者が社会的慣習を破ったときの決まりの悪さといったことの経験のしやすさにかかわってきます。

② 他人のことをより一層気にすることは、心理的な側面だけから必要になるのではなく、前もって計画し、将来の結果に焦点を当てて行動を予測する能力を含むことになること。とくに、宮廷社会における公私の生活の区別の不足は、身体が永続的に目の前にさらされ、いつも警戒心と管理を必要とする対象となることを意味していました。

③ このような宮廷社会内部の区分への探求の結果として、「子どもと大人との間の身体的、心理的距離」はますます拡大することになること。エリアスに従えば¹⁸⁾、西欧社会における「成長」の過程とは、まさに若者が長い年月を経た社会的な文明化の過程の結果として、最

も早い子どもの時期から自動的に従属させられる個人的な文明化の過程以外の何ものでもありません。大人によって訓練される自己抑制の程度は次第に高まり、文明化された身体を發展させるために数多くの学習がそれに見合って行われ、社会のメンバーとして十分に受け入れられるようになります。したがって、逆に子どもの意識や欲望に関連する問題は、大人と子どもの関係に組み入れられる量的、質的距離の取り方によって変化するものに他ならず、歴史的な時代を越えたところで（それと関係なく）子どもの「社会化」の統一性が發展させられているわけではないのです。この議論は、現代における「文明化された身体」への歴史社会的な再検討の必要性を指摘すると同時に、現代スポーツの意義を新たに問い直す契機を与えてくれるように思われます。

そこで次に、近代スポーツの発生と身体／暴力の問題について、先の2つのシステムテックな視点、すなわち一方で労働の社会的分業の増大、進行と、他方で効果的な暴力の独占機構の整備が国民国家（nation states）形成のレベルで相互に関連、依存し合うという視点から考えてみたいと思います。

4. 近代スポーツの社会的発生と身体／暴力¹⁹⁾

さて、暴力論からみたイギリスにおける議会制度化の発達と近代スポーツの社会的発生との関係については、すでに多木の文献の検討を通して明らかにしておきました。ここでは、暴力行為を伴わない権力構造の多面的な変化と自己の身体的暴力の抑制に向かう長期的な人格構造の変化、またその同時発生的現象としての近代スポーツの生成がもたらす身体と社会との意味関係について若干考察してみたいと思います。

まず、多様な身体抑制に伴う感情抑制のもっとも原点に位置するのは、身体の暴力的行使をいかに抑制するかでありましょう。経済的禁欲による拡大再生産をもたらした資本主義の精神、政治的禁欲による議会制度化の精神の根底にあるのは、宮廷社会の階級的接近に伴う競争

から発達したマナーやエチケットの問題にとどまらない暴力回避の根源的な身体的マナーをどのように確立するかにあったと思われます。逆に言えば、意識する、しないにかかわらず、この課題の解決を身体的レベルで達成しなければ、近代国民国家の形成は成し遂げられず、人々の関係は常に不安定な状況となり、他者への猜疑心と脅威にさらされることになると考えられます。

近代産業社会を前提とする国民国家は、人口の都市集中化と人口密度の偏在をもたらし、それと同時に労働の社会的分業の増大と進行をもたらしめます。このことは、人々の相互依存関係の連鎖（つながり）の拡大を意味し、個々人の密度が増大し、相互依存関係が頻繁になればなるほど、人々は自分自身の行為や他者の行為の現在や将来への影響をより多く配慮し、自己規律化していくことになります。そして、当初は感性的、感情的、身体的な配慮であったものが、次第に理性的配慮と新たなタブーへの原則を下から無意図的、無計画的に構築していくこととなります。また、その一方で、近代国民国家の形成は統一的なポリス（警察）を制度化することによって、効果的な暴力の独占機構を整備し、日常生活における身体的危険の減少とその予測可能性を高めることになります。この上からの効率的で実効性のある暴力の国家管理・独占の進行は、人々が自らの暴力行為を政府によって処罰されることを自覚すればするほど、自らの攻撃的衝動を監視し、抑制する傾向を強める結果となります。すなわち、この上からと下からの暴力統制のメカニズムは、身体の自己規律化と他者に対して相対的に従順な身体とを形成していくことにつながるというわけです。

このような暴力統制のメカニズムは、同時発生的に前近代的な暴力の形式を伴う身体的ゲームを、比較的暴力が抑制された身体的ゲーム形式へと変化させていく方向を伴うことになります。そして、このような攻撃性や残虐性への身体的衝動が抑えられていく変化の重要な特徴は、直接的な行為から模倣的（mimetic）な活動や、それを見ることの喜びへの情緒的変化にあ

ります。つまり、「感情の抑制された中での脱抑制 (the controlled decontrolling of the emotions)」²⁰⁾を確保する近代スポーツの社会発生的意味は、社会が暴力の自己抑制に向かう中で多少なりともその模範的形式として、すなわち社会的飛び地としてルール化された身体の暴力「性」を承認するという方向と、身体の自己規律化(暴力のタブー視などを伴う)の象徴として近代スポーツを承認するという二重性をもっているのです。

そして、前者は感情の脱抑制の方向を現実社会の抑圧された身体の「解放」という単なるカタルシスとして承認するというよりは、近代スポーツ内部の多様な「模範的」緊張による「興奮の探求」の時空間として、それを位置づけようとします。したがって、確かに前者の「解放」という意味では、結果としてスポーツの場において抑圧された身体が解放され、自己規律化された現実の厳しいマナーが興奮と共に崩壊していくことを承認することになります。また、前者のさらに積極的な意味における「模範的緊張による興奮の探求」の延長線上では、スポーツ場面で許容される男同士の抱擁や裸体によるパフォーマンス、あるいは多少暴力的な行為やしぐさまでもが1つのスポーツ「文化」として承認される傾向を生み出す可能性があるということになります(近代スポーツは、まさにそのような身体をメディアの発達とともに幅広く許容しているように思われます)。

次に、先に示した後者の意味における身体や感情の自己抑制の象徴としての近代スポーツの場は、これまでもとくに体育関係者の社会的機能の拠り所としてルールやマナーの徹底、フェアプレーの貫徹を教化、社会化することによって承認されてきています。とりわけ、時代精神や生活への規律化が声高に叫ばれる社会情勢——例えば、軍事社会、高度産業化社会——にあっては、まさにそのイデオロギーとしての価値がより一層高められる傾向にあることは衆目の一致するところでありましょう。

このように、身体とその暴力との関係において近代スポーツの二重の社会発生的意味を考察

していきますと、その近代的発生から現代社会への長期的な変化の中で身体それ自体の文明化、すなわち「文明化された身体」と、現代社会における暴力の意味やそれと関連した現代スポーツの「文明化の過程」の相対的位置づけを再度行う必要性が感じられます。それは、先に述べた多木が断念した現代スポーツにおけるエリアス派スポーツ社会学の応用可能性を問うことでもあります。その意味で、エリアス派スポーツ社会学の身体論を、現代社会における「文明化された身体」へ再接近させ、そこから「現代スポーツと身体」をめぐる若干の考察を試みてみたいと思います。

5. 文明化された身体への再接近

ー「現代スポーツと身体」への応用可能性ー

本学会の会員である亀山佳明氏は、ダニングらの著書 *Barbarians, Gentlemen and Players* (1979) に基づいて、現代化という身体性の移行の基準を「自律性」「合理性」「形式性」「普遍性」の4つに置き、その実現によって遊戯する身体の現代化が示されると考えています²¹⁾。ところで、ここでの議論(本稿)では、身体がすでに階級的な「対照の縮小」と「変種の拡大」の下で、一方では規律・訓練化された、他方では差異化された多様な階級的身體となっていくことを踏まえて、文明化された身体の発達を「社会化(socialization)」「合理化(rationalization)」「個別化(individualization)」の側面から考察してみることにしたいと思います²²⁾。

「身体の社会化」とは、身体の自然的機能(理念型としての身体の零度)が隠され、身体が行動のコードの表現として、それに限定されるように変換されることを意味します。身体はますます社会的なものとして認知され、操作され、その機能の次元は時には生活の生物的、自然的領域の反対に位置づけられるようになります。

このことは、半ば必然的に「身体の合理化」を伴います。中世において、衝動は比較的瞬時に意識や行動に現われました。しかし、文明化された身体の発達の中で意識と衝動の境界は明確になり、「モラル」や「合理的志向」によって

明確な自己コントロールを行うようになります。それは、自動的、情緒的な衝動と骨格筋の間に割って入り、満足の延長を実現します。また、身体の合理化は、身体の差異化（区分化）を進行させ、それが次第に「全体性」を欠くことによって、その分離された部分は外部のコントロールに比較的従順な身体現象を生み出していくことになります。

さらに文明化の過程が進行して、身体が社会化されればされるほど、身体は人々がほとんどそれに抗うことができないような行動のコードを表現し、その中で位置づかざるを得なくなります。また、同様に身体が合理化されればされるほど、人々はより一層能力を高めて自らの身体をコントロールしようとし、またそれを要求する外部からの高まりはそのようなコントロールの機会を増し、さらに一層自らの身体をコントロールしていく方向を推進していくことになります²³⁾。

自己と「身体の個別化」は、三浦が論述したように認識の対象としての自己の身体を他の身体から分離し、隔離して、他者から孤立した自己イメージを形成する近代的自我の確立の前提となります。この身体の個別化は、人々の間で彼らの身体が自己抑制や自己規律化の対象として自省される程度や機会が多くなり、他者と異なる自分を認識する作法（マナー）を発展させたことによって生じた重要な結果なのです²⁴⁾。

結局のところ、文明化された身体では、人間の身体それ自体が当惑の根源になり、次第に行動の社会的規範に従って操作される対象にならざるを得なくなるのです。エリアスが定義する文明化の過程は今なお進行しており、それは近代人のアイデンティティの感覚（sense）に及ぼす身体的重要性をますます強調しています。このような個別的感覺における文明化された身体の発達には、ますます人間を孤立化させ、その上要求される自己抑制、自己規律化された身体に伴う感情にまで及ぶコントロールは、逆に人々の身体内部や感情の生氣（はつらつさ、野生性）をなくしてしまう方向に導いていくことになります²⁵⁾。

宮廷社会では、前述したように、強力な、個人を超越する社会的（地位的）システムや宗教システムの存在が、そこに暮らす人々に行動の基準と合理性を与えました。しかし、現代社会の人々は、彼らの文明化された身体の限界に対する生理的、感情的、理性的反省を強めながらも、ますます孤立化していき、しかもこのような状況を正当化する、社会的に重要で妥当な資源を持っていないように思われます。突飛な話ではありますが、このような意味でオウム事件は、われわれが文明化された身体の限界を突破しようとする基準を正当化する社会的資源を、未だに持ち合わせていない例証になったと言えるのではないのでしょうか。

したがって、冒頭に述べた身体論を中心とするエリアスの（半ば流行的な）取り上げられ方は、開かれた個人における相互依存的な身体それ自体の復権を意図しながら、現代社会における新たな身体的コミュニケーションの可能性とその基礎となる考え方を求めようとした動きとも考えることができるように思います。われわれが位置するスポーツ社会学の理論的可能性も、当然のことながら近代スポーツの社会発生的意味における身体（性）の社会学を基盤としながら、新たな身体的興奮の探求とその意味を冷静に分析し、評価し、身体的コミュニケーションの独創的なモノサシ（基準）を伴う社会的資源として「スポーツからの社会学」を構築せねばならないと考えます。ここに、エリアス派スポーツ社会学からみた身体／Bodyの理論的可能性が秘められているように思われます。

6. ブリテッシュ・カルチュラル・スタディーズ（BCS）との論争が意味するもの²⁶⁾

最後に、エリアス派（スポーツ）社会学、あるいはフィギュレーション社会学とBCSとの論争を取り上げることによって、エリアス派の特徴について確認しておきたいと思います。とは言え、残念ながら現在のところ、身体／Bodyをめぐる両者の際立った論争は明確な内容として出てきていない現状にありまして、その主な争点は両者の方法論をめぐって展開されている

ように思われます。いくつかの著書や論文によってお互いの解釈や批判の相違点をみることはできますが、ここではとりあえずエリアス派からどのような批判の見解とその異同が示されているのかについて、比較的冷静な分析を行っていると思われるクリス・ロジェック (Chris Rojek) の見解をもとに要約してみることにしたいと思います²⁷⁾。

まず、彼は、BCSの理論的、方法論的問題点について次の3点を挙げています (ちなみに彼は、スポーツ研究に携わるBCSを「ネオ・マルクス主義的カルチュラル・スタディズ」と呼称しています)。

① BCSの研究は、結局のところ現代における出来事を単に記録したにすぎない場合が多い。理論や何らかの分析可能な命題や仮説が全くと言ってよいほど提出されていない。

② そもそもBCSは、伝統的マルクス主義の批判から出発して、サブ・カルチャーの重要性やその多元主義を求めたが、多くの不合理な推論や非論理性が現れており、返って伝統的マルクス主義 (下部構造論) へ回帰する傾向がみられるのではないかと。

③ BCSの研究対象は極めて限定的であり、小英国主義的気質を反映させている。社会学的研究における特殊と一般、地方と全体といった対象のバランスからすれば、その公平性に欠けている。

また、BCSが理論的には、比較的アンソニー・ギデンズ (Anthony Giddens) の「構造化の理論 (structuration theory)」に近いとの判断から、分析の出発点をめぐってエリアス派あるいはフーコー、ターナーらとの違いを次のように述べています。すなわち、ギデンズと彼の学派は、分析の出発点を互いに向き合った行為者の位置づけられた活動 (situated activity) に置くが、エリアスらは位置づけられた身体 (situated body) にその出発点を置いているということ。そして、人間は活動を可能にする以前に、身体的な過程 (bodily process) に関する意識やコントロールを獲得しなければならないのであり、そこに身体的抑制や過剰の意味を社会学的

に追究する視点が生まれると考えるのです。

BCSからエリアス派への批判のポイントには、①エリアス派が自らを「行為-構造」の二元論を克服し、過程的な社会学を構築しようとする唯一の学派であることを過度に強調する表象的 (presentational) な問題、②エリアス派の自己内省的 (self-reflexivity) に関連した方法論的問題、すなわち研究対象から分離 (detachment) することによってアウトサイダーとして位置づく危険性、③「文明化の過程」に関する理論にみられる「機能主義的」「進化論的」性格に対する理論的問題、の3点です²⁸⁾。

いずれの側からの批判や相違点についても、ロジェックはかなり丁寧に自らの見解を交えながら論評を行っていますが、ここでは紙幅 (時間) の関係上、ポイントを指摘するに止めたいと思います。後ほどの議論の中で、具体的な異同についてさらに詳しい論評を行えばと思います。

注および文献

- 1) 田中義久編著、1996、『関係の社会学』、弘文堂、における「第6章 感覚と隠蔽された力」(pp.131-152) では、自他を弁別するありふれた文化としての機能や形式の自明化が、社会関係を形成する点に着目する。
- 2) 三浦雅士、1994、『身体の零度』、講談社 (選書メチエ)、における「第二章加工」(pp.42-83) に詳しく述べられている。
- 3) 多木浩二、1995、『スポーツを考える』、筑摩書房 (ちくま新書)、における「序章 方法としてのスポーツ」(pp.7-23) および「第一章 近代スポーツはなぜイギリスで生じたか」(pp.25-49) で取り上げられている。とくに、後者では、近代社会のモデルとしてのスポーツのゲーム性に着目し、エリアスの考え方をを用いて、それを実現する歴史社会的な身体を一応読み解いてみせる。
- 4) 井上俊他編、1996、『岩波講座現代社会学 第4巻 身体と間身体社会学』、岩波書店、pp.163-180. 所収。
- 5) 三浦雅士、1994、前掲書。三浦は、とくにエリアスの言う「不快感」に着目し、それこそが文明の核であり、それをもとにした他者との距離化は、歴史

- 社会的につくられていくことを重視する (pp.59-63)。
- 6) 多木浩二, 1995, 前掲書。
 - 7) エリアスが初めてスポーツ関連の研究を著わしたのは, 1966 年におけるダニングとの共著「スポーツ集団のダイナミクスとくにフットボールに関連して」(*British Journal of Sociology*, 13-4)であり, この間およそ30年の歳月が流れている。山下高行・菊幸一, 1996, 「ヨーロッパ・スポーツ社会学の動向と1997年国際シンポジウム」, 日本スポーツ社会学会編『スポーツ社会学研究』4, 1-12. を参照。
 - 8) エリアス自身が, もっともまとまった自らの方法論的基礎を述べた文献に, Elias, N., 1970, *Was Ist Soziologie*, Juventa Verlag (徳安彰訳, 1994, 『社会学とは何か』, 法政大学出版局)がある。また, 池井望, 1995, 「フィギュレーション社会学と近代スポーツーN. エリアス論ー」, 日本スポーツ社会学会編『スポーツ社会学研究』3, 71-76. や, 拙稿, 1995, 「“Sport and Leisure in the Civilizing Process critique and counter-critique”について」同上誌, 77-81. においても, 方法論的特徴に関する若干の議論が展開されている。
 - 9) ノルベルト・エリアス, 徳安彰訳, 1994, 『社会学とは何か』, 法政大学出版局, 4.
 - 10) Rojek, C., 1992, “The Field of Play in Sport and Leisure Studies”, in Dunning, E. and Rojek, C. (eds.) *Sport and Leisure in the Civilizing Process*, Macmillan, 14.
 - 11) 「文明化の過程」という概念を, ある達成された文明化の水準や進化論的概念と混同する議論は, 数多くみられる。例えば, ダニングへの反論を企図したカーティスのとらえ方は, その典型であろう。Curtis, J., 1986, “Isn’t It Difficult to Support Some of the Notions of ‘The Civilizing Process’? A Response to Dunning”, in Rees, C.R. and Miracle, A. W. (eds.) *Sport and Social Theory*, Human Kinetics (菅原禮監訳, 1991, 『スポーツと社会理論』, 不昧堂出版, 64-74.) を参照。
 - 12) 菊幸一, 1995, 「“Sport and Leisure in the Civilizing Process critique and counter-critique”について」, 日本スポーツ社会学会編『スポーツ社会学研究』3, 77-81. を参照。
 - 13) Elias, N., 1969, *Über Den Prozess Der Zivilisation*, Francke Verlag (赤井慧爾他訳, 1977, 『文明化の過程 (上)』, 法政大学出版局, および波田節夫他訳, 1978, 『文明化の過程 (下)』, 法政大学出版局) および Elias, N., 1975, *Die Höfische Gesellschaft*, Hermann Luchterhand Verlag (波田節夫他訳, 1981, 『宮廷社会』, 法政大学出版局)。
 - また, ここでの議論と同じ問題意識からエリアスのスポーツ論への移行を扱った論稿として, 岡田猛, 1989, 「N. エリアスにおける課題としてのスポーツ」, 体育・スポーツ社会学研究会編『体育・スポーツ社会学研究 8 スポーツの社会学的意味をさぐる』, 道和書院, 51-65. を挙げることができる。
 - 14) とくに『文明化の過程 (上)』では, 「第二部 人間の風俗の独特の変化としての『文明化』について」(pp.137-420)でこの問題を扱っている。また, 現代スポーツにおける薬物使用の問題に関連させて, その論拠となっている健康の概念が, 医学的な衛生思想以前に, すでに習慣化された身体的マナーの延長線上に成立していたことから, とりわけ過剰な感情的デリカシーを伴ってこの問題を取り扱おうとする現代人の態度に対する歴史社会的な構造性がすでに存在していたことを論証する論稿もみられる。Waddington, I. and Murphy, P., 1992, “Drug, Sport and Ideologies” in Dunning, E. and Rojek, C. (eds.), op. cit., 36-64. を参照。
 - 15) ノルベルト・エリアス, 波田節夫他訳, 1981, 前掲書, 141-142.
 - 16) ノルベルト・エリアス, 波田節夫他訳, 1978, 前掲書, 363-375.における「対照の幅の縮小, 変種の増大」を参照。
 - 17) Shilling, C., 1993, *Body and Social Theory*, SAGE, 159.
 - 18) ノルベルト・エリアス, 赤井慧爾他訳, 1977, 前掲書, 法政大学出版局, 59-60.
 - 19) 本節における議論は, Elias, N. and Dunning, E., 1986, *Quest for Excitement*, Basil Blackwell (大平章訳, 1995, 『スポーツと文明化』, 法政大学出版局)の内容を主に参照している。
 - 20) Maguire, J., 1992, “Towards a Sociological Theory of Sport and the Emotions: A Process-Sociological Perspective” in Dunning, E. and Rojek, C. (eds.), op. cit., 114.
 - 21) 亀山佳明, 1996, 前掲書。
 - 22) Shilling, C., 1993, op. cit., 163-167.
 - 23) クリス・シリリングは, このようなエリアスによる身体の社会化や合理化に関する歴史社会学的視点に

- 基づく分析が、ゴッフマン、フロイト、ハッシュチャイルド等の身体論を補完するものとして高く評価している (Shilling, C., 1993, op. cit., 164)。
- 24) Wright, G. H., 1980, *Culture and Value*, Blackwell, 11.
- 25) 同様な見解は、今福龍太, 1995, 『野性のテクノロジー』, 岩波書店, あるいは、鷺田清一, 1996, 「スポーツと身体文化」, 小椋博監修『新・スポーツ文化の創造に向けて』, ベースボール・マガジン社, 90-94. にもみられる。
- 26) この節は、実際のシンポジウムでは、時間の関係で発表できなかった内容であるが、特別寄稿の紙幅

を借りて、簡単にまとめて紹介しておく。

27) Rojek, C., 1992, op. cit.

28) ここで参照したクリス・ロジェックの論稿を含めて、デービッド・ジェリーとジョン・ホーンは、B C Sとフィギュレーション社会学との異同を詳細に検討しているが、紙幅の関係上、それに関する論評は他の機会に譲りたい。デービッド・ジェリー, ジョン・ホーン, 市井吉興・坂なつこ訳, 1995, 「スポーツ・レジャー研究におけるフィギュレーション社会学再論」, デービッド・ジェリー他編『スポーツ・レジャー社会学』, 道知書院, 171-210. を参照のこと。

日本のスポーツと身体／BODY

今日私は運動会のお話を、主として明治期の運動会のお話をさせていただきます。その話をしていく前に、二点ほど、なぜそういうお話をするのかということの、バックグラウンドについてちょっと触れさせていただきたいと思います。私は体育やスポーツの専門家でも全くありませんし、今日話す運動会というのも、本当にスポーツの話なのかと聞かれますと、私自身の問題関心の焦点ということではいいますと、若干そこからずれるということをまずお断りしておきたいと思います。と申しますのは、これまでやってきた研究は、具体的なフィールドで申しますと、『盛り場』ですとか、『博覧会』ですとか、『天皇巡行』ですとか、『運動会』ですとか、そういういわば広い意味での祝祭する身体、集う身体、儀礼する身体、そういう身体と近代あるいはネイション・ステイト、資本主義との関係性を巡る問題に様々な形でアプローチしようとしてまいりました。運動会というものも、そういう祝祭する、群れ集う身体というものを近代国家との関係、近代のネイション・ステイトとの関係で考えるときの一つの切り口として私のなかでは位置づけられています。第二点目に申し上げておきたいのは、ではなぜそういう広い意味でのポピュラー文化の研究を、具体的には、盛り場や運動会ですとか、博覧会なんかに焦点を当てながら、やろうとしているのか、と

ということなのですが、私自身としては、ある意味で批判的に、できれば乗り越えられたらいいなと思っている視点が三つございます。一つは狭義の文化人類学的なアプローチ、あるいは儀礼研究です。例えば文化人類学的なパースペクティブから、運動会とか、ここで私がいった盛り場や博覧会といったことにアプローチしていくことも、おそらく可能であろうかと思いますが、しばしば人類学が、そういう儀礼の場、あるいは祝祭の場を全体社会のコンテクスト、権力とか政治とかジェンダーとか様々なコンテクストのせめぎ合いというものから切り離して、独立させて閉じた構造として捉えることに私は批判的です。狭義の伝統社会、未開社会の儀礼のアプローチをそのまま近・現代社会に持ってくるのはナンセンスだと思うわけです。では二番目に、同時に、だからといって、盛り場だとか、運動会だとか、博覧会だとかいう場を、資本主義なり、近代の国民国家が操作する場、狭い意味でのイデオロギー装置論的な形で大衆意識が操作される場として捉えるということに対しても、反対なわけです。三つ目に、民衆文化と、それから支配的な文化、あるいは自発的な文化と、それを操作したり抑圧したりする国家の構造という、そういう二項対立図式というものも限界を持っています。民衆文化論の最も上質な部分である、例えば大正期の権田保之助の民

衆娯楽論とか、鶴見俊輔さんの限界芸術論の問題とか、初期のカルチュラル・スタディーズがやっていたことまで含めて、ある民衆文化と支配的文化の拮抗関係、あるいは対抗関係の形だけで問題というものはいくらも捉えられないんじゃないか、という気がします。では、どこにいくのかということになりますと、もっと、重層性、あるいは多層性、それがジェンダーだったり、階級だったり、それから様々な主体の間の、多層的な構造のなかに、差異の構造のなかにポリティクスを読んでいく、というのが必要であろうと大まかに思っています。そういうことの一つのアプローチとして、運動会というのを考えていきたいと思います。

さて、今日の私のお話は、ほぼ四つの点からすすめていきたいと思います。第一の話は、運動会の概念つまり、運動会というジャンルそのものが、いつ頃、どういう形で成立したんだろうか、あるいは、本当に成立していたんだろうか、といういわば、運動会というドラマの成立そのものに関する問題です。それから、二番目の話というのは、運動会のなかでの子供たちの身体を巡って、明治国家のエリートたちはどのようなシナリオを設定していたのか、というような、いわば演劇のメタファーでいえば台本、シナリオに当たる問題です。そして、実際に運動会、特に明治30年以降の運動会において、どういった演出がされていったんだろうか、ということが三番目のお話です。そして、第四番目には、しかしながらそうやって演出され、ナショナルに演出された運動会というものの経験のなかに、どのように村祭りの経験というものが多様に表れていったのか、という話です。その四つの論点をふまえて最後にまとめをしたいというふうに思います。

では、まず第一の運動会がどのようにして成立したのかという話から始めます。だいたい学校行事として運動会が全国へ広がり始めるのは1885年頃からです。そして、そのあとわずか数年間で、全国に普及して、遅くとも1890年代後半までには列島全域に広がっていたと思われる。とりわけ1894年の日清戦争の勃発は、運動

会が全国の主要な学校行事になっていく方向に強く作用しました。文部省の体育及び衛生に関する訓令なんかも影響して、1890年代末までには、全国的に、北は北海道から南は台湾までを含め、運動会は学校行事として重要な位置を占めるようになっていました。しかしながら、この頃の運動会は我々が現在考えているような明確な概念で成立していたわけではありません。実際には、遠足とか、行軍とかと区別できないものでした。当時、運動会の実施場所は、ほとんどが校内の運動場ではなく校外の海辺や川原、丘、神社の境内であり、その内容も行進を主体とするいわゆる「遠足遊戯」に他ならなかったわけです。児童が集団で離れた川原や境内、野原で遊んだり、行進したりする活動というのは、いずれも「運動会」とも「遠足」とも呼ばれて、両者のカテゴリーを分けて捉えていく発想は、この頃にはまだほとんど見られませんでした。遠足と運動会のこうした混同というのは、明治前期に、運動という言葉が持っていた独特の含意とも関係があります。当時、運動は、スポーツ一般というより、端的に散歩を意味していました。もちろん自由民権運動の「運動」もまた別にあるわけで、ちょっと散歩だけというの言い過ぎなんですが、例えば坪内逍遙は「当世書生気質」のなかで、散歩という言葉に運動というルビを振っていますし、それから、三遊亭円遊は運動がてら出かけるという言葉を使ったりしています。運動場という言葉も劇場のロビーという意味に使われていたというケースもあります。「運動とお花見」と題して「風俗画報」に掲載された、これは1892年ですけども、その論説は、こういった、当時の運動会のイメージの一端を示しています。この論者は、運動会は決して最近の発明品ではなく、江戸時代からあったものだといっています。この著者によれば、昨今の運動会は「寺子屋の師匠などが寺子を数多引き連れて御殿山の花に戯れ、三弦の師匠が弟子どもを打ち集めて向島の桜に浮かれ、鬼ごっこ、玉突きやそんなことをして一日過ごし」たのと、なんら変わらないというふうにいっているわけです。もちろんこれ

は一面的でして、もう一面では運動会とは、強力に軍隊の軍事演習というイメージが、付与されていました。実際、当時の運動会について記述したいろんな新聞記事なんかに、これは軍事演習を模しているということが盛んにいわれて、運動会と軍隊の行軍との類似性が確認されています。こういった学校行事としての運動会の発達と、そのモデルとしての軍事演習の大規模化は、ともに1890年代後半から並行的に起きた現象で、これは、陸海軍といいますか、軍隊の天皇の統率の元に、体系化されていくということが同じ時期に、1880年代後半から90年代、明治20年代初頭にかけて、急速に起こっていくんですけども、こうしたことと、非常に関係があるわけです。明治国家は、こうして1880年代後半から90年代初頭にかけて、軍事と教育の両面でその規律・訓練的な国民の訓育システムを急速に整備していったのです。

じゃあ、その運動会というイベントに対してどのようなシナリオが付与されていったのか、というのが第二番目の話で、そちらに移ります。明治日本の運動会の普及の前提を形づくったのが初代の文部大臣森有礼です。森は、各地の学校を巡視してゆくなかで、体操や唱歌が、「遊惰の習慣を存する地方においては殊に重要である」ことを力説し、また「体操は時々3〜4里以内の諸学校より生徒を集合し、隊列運動及び学校と学校との競争遊戯等活発の挙動をなさしむるを可とす」と述べています。注目したいのは、運動会の発展は森の教育思想の根幹だった二つの戦略を実践する効果的な方法、森自身の言う、「道具責めの方法」と深く結びついていた点です。森は、一方でこの国の子供たちが、近代的な身体技術を獲得した主体へと残らず調教されていかなければならないと考え、他方で、そうした主体の力能が、天皇を頂点とする国家的な共同性のなかに一元的に回収されていかなければならないと考えていました。そして、これら二つの相互に連動する国民＝国家的な身体工学が試され、作動させられる理念的な装置として学校を捉えていったわけです。こういった発想は、森が、アメリカ大使として赴任

していた、かなり早い段階から森のなかに生まれていたように思います。その背景として、彼が薩摩藩の藩士として留学しているときに、スウェーデンボルグ系のコミュニン運動の指導者、トマス・レーク・ハリスに帰依し、アメリカのコミュニンで一年ほど過ごすわけですが、そのときのキリスト教といいますか、神とコミュニンのメンバーとの関係性を、国家レベルに置き換えていこうという発想があったんじゃないかと思われます。森の教育観の根幹を形作っているものの一つに、1879年に彼が東京学士会院で発表した「身体能力」論があります。彼はこの中で、教育が促進させるべき知識、徳義、身体能力のうち、我が国の人々の最も欠けているのはその根本である身体能力であるといっています。森によれば、日本人の身体は、「軟弱なる真に嘆息に堪えざるほど」で、森は日本人の身体能力に欠乏するところの理由をいろいろあげてゆき、それらの要因全てを速やかに改良していくことはできないが、そのいくつかの改良は教育法などの変更によって可能となるというふうにいっています。森が強調するのは、教育を身体の上に行うことです。森がもくろんでいたのは、あくまで日本人の身体能力を欧米人のそれに匹敵するほどまでに改造することであり、そうした身体調教の手段として、彼は兵式体操に注目し、またそうした調教システムを軍隊から借用しようとしてきたのです。そういった意味では、体操は、森が考える新しい国民の身体を養成していく政治技術に他なりません。これは、園田英弘さんの指摘のなかにもあるのですが、森は国家を、人工的で機能的な構成物と捉えています。彼は単一の政治イデオロギー、例えば道徳思想によって全国民の内面を全面的に統制し、国家の秩序を確立しようとしたのではありません。また、彼は政治支配の対象である国民の被統治者としての教化だけを意図したのでもありません。彼は疑いもなく、政治の主体であると同時に、客体であるような、正しい意味でのネイション、国民を形成するために教育は貢献しなければならないと考えていました。従って森

は、決して政治支配の客体に要求される従順だけを主張したのではなく、政治支配の客体が同時に主体でもあるという関係を創出しようとしたのです。そしてそのように相互的な関係にある国民と国家を同時に可能にしていく枠組み、制度として、教育、学校を考えていました。しかも、兵式体操によって調教される身体は、明治日本が創出しようとしていた国民国家の枠組みのなかに絶えず配置されていく必要がありました。また、こうした国家的枠組みこそが体操による児童の身体の規律・訓練化を可能にするはずでありました。森が見抜いたように、このような関係を機能させていくためには、国土にあまねく行き渡る天皇のまなざしが必要でした。森は、暗殺される直前に、諸学校への天皇の行幸を慣例化していくことを計画していましたが、森自身も、天皇を代替する形で、全国の学校を精力的に巡視しています。こうして1880年代後半、集中的に行われた森による全国の諸学校への巡視の戦略は、1890年代以降、御真影と結合しながら祝祭日の学校行事のなかに定着されていくのです。

それでは、そういったシナリオをふまえて、実際の運動会というのは、どういうふうに演出されていったのでしょうか。先ほど申し上げた、三番目の話です。運動会は、1900年代頃までにその内容も整備されて、独自のジャンルとして確立されていきます。特にこの頃の運動会では、種目が大幅に増えてます。様々な種目が一気に入ってきて、急速に種目が40種類から50種類に増えていったのです。こういった種目の増加によって、運動会のあり方も、みんなどこかへ遠足のように行列して行って、野原や川原で戦争ごっこをやっかえってくるようなタイプのものから、現在の運動会にかなり近い形に転換していったわけです。こういった、明治後期の運動会における競技種目の発展は、児童の間の競争意識の構造を少しずつ変化させていきました。初期の運動会のように、ほとんど行進や体操か、数組に分かれて模擬戦を演じていくような内容だけからなっていた場合は、各集団の共同意識と相手集団に対する対抗意識が

高められることはあっても、参加する児童各個人の運動技能が序列化されていったり、それを巡って子供たちが互いの競争意識を強化させていくことは稀でした。ところが、明治後期に入って、運動会のなかでの競技種目の増加により、運動会が、参加する児童各人にとって自らの技能が衆目のなかで可視化されていく機会として経験されていくことになります。運動会は次第に、遠足や模擬戦という以上に学校の試験にも似た性格を帯び始めるのです。例えば、嘉納治五郎も「琉球教育」の記事のなかで、運動会は決して一つの見せ物ではなく、一方において、保養場となるとともに、また一つには平素心身の鍛練如何を為すべき試験場となるべきということをいっています。しかし、運動会が試験場のごときものとなるには、競技内容だけでなく、そうした競技が行われる空間が、児童の精密なる観察を容易ならしめるように整備されていく必要がありました。この点で非常に重要な意味を持ったと考えられるのは、1900年代以降、次第に運動会の開催場所が学校内の運動場に移ってきたことです。さっき申しましたように明治20年代の前半頃までは、多くの運動会は、川原や原野とか、社寺の境内とかに出かけて行ってやったのですが、明治末から大正にかけ、運動会はむしろ学校の校庭で催されるようになっていきます。この変化により、学校から目的地までの行軍要素が消え、また移動に、2、3時間も費やす必要がなくなったため、多数の種目が実施できるようになったのです。しかも、運動場という区画化された領域において、集合した児童たちの身体技能は、以前よりも遥かに容易に可視化され、測定されていくことができるようになりました。このように、運動場が全国の学校で本格的に整備されていくのは1900年代以降のことです。これは1900年の小学校令の発布に関係しています。明治前期の学校施設の中心はあくまで教室にあって、その補完的な役割を野外の活動に求めるという傾向が強かったようです。従って、校庭という言葉はあったにはあったんですけども、あくまで学校における庭園という意味であったようで

す。そして1890年の小学校令の改正においては、確かに、小学校では校庭、体操場を備えるべしと明言されていくわけですが、難しい条件がある場合は体操場を備えなくてもよいという例外規則もありましたから、そんな強力な実効性はありませんでした。しかし、1900年の再改正では、こういった猶予もはずされて、非常にリジッドにこれだけの坪数の校庭をこういうふうにつくっていかねばならないということが制度化されていくわけです。

運動会が、児童一人一人の運動能力の試験のようなものになっていく過程というのは、競技に対する報奨制度の作用とも結びついていました。運動会誕生当初から成績優秀者には賞品授与が行われてきましたが、初期にはそれほど明確に位置づけられたものではないですから、かなり、恣意性を含んでいたわけです。ところがこのように種目が増え、徒競走とかリレーとかより多くの競技が行われるようになりますと、より精密に、子供たちの技能に対して賞品が授与されるということが確立していくようになります。もちろん同時に、この子供たちの競争意識を高めていくということは、運動会本来の主旨からの逸脱じゃないのかという批判もこのころから出てきます。運動会は子供の集団意識だとか、集団的協調心ですとか、共同意識ですとか、団結心を強めていく方向に向けていかねばならないんだという議論が同時並行的に起こっていくわけです。その二つの要請をどのように調停するかということが、この頃の運動会の主催者側の基本的な課題でした。つまり、運動会は、競争的であると同時に、団体的でなければなりません。それは、単に児童の競争を刺激するのではなく、集団的な団結心を養い、主体化された児童の身体を国民国家が必要とする臣民の身体へと変えていかねばならない、という要請がくるわけです。こういったことを、いろんな現場の学校の先生たちが、いろいろ工夫をしていくわけです。例えば、ここに一つだけ例をあげてますが、埼玉県桜田小学校では四つぐらいの工夫をしたということがあります。四つそこにあげていますが、応援

団の組織化とか、いろいろありますが、四番目だけちょっと紹介させていただきますと、団体競技に全児童の注意を集中せしむるために、全校児童の紅白競争成績は各学級紅白競争の成績を通算して決することとし、通算成績のよい方に団体の優勝旗を授与していったのです。その結果、現に競争している児童だけでなく、観覧席にいる児童が誰も彼も今演じている団体競争に重大な関係がありますので、応援が猛烈を極める、一競技ごとに提出される赤又は白の得点に全児童が一喜一憂するようになりました。つまり、団体と個人の競技との関係を明確にして、得点で競う、というやりかたをやるわけです。こういったような一連の戦略が、巧妙にいろいろ為されていったと思います。各々の競争は当事者だけの競争ではなくて、より大きな集団間の戦いとして様々に提示されていったわけです。競技をしている幼き選手たちは、おのれの優越感や劣等感という以上の集団の期待を引き受けざるを得ないことになります。また観客も、単に競技をしているのが自分の友人だから応援するのではなく、自身も帰属しているより大きな集団のために必死で応援していくことになります。そして、この拡大されていく集団の身体性、集団的な身体性の行き着く先というのが皇国日本という国家的な身体性の水準であるといえます。

さて、四番目の話になりますが、1900年代以降になりますと、いろんな教育雑誌で運動会の批判や、長所や短所や様々な議論が非常にたくさん続出する、一気に増えてくるという感があります。1890年代にもこういう運動会がありましたという報告はあったんですが、運動会そのものが論じられるということはそんなに多くはないんですが、明治30年代後半になるとそれが非常に増えていく印象があります。それはどうということかと考えていきますと、ようやく運動会がこれほど広がっていくことによって、逆に運動会が持っている国家的意図がそれほどうまくいかないんだ、国家的意図通りに運動会が運営されていかないということの問題に人々が気づき始めたことを示しているんじゃないかと思

います。この困難さは、運動会は国家の祭りとしてだけでなく、村の行事として存在していたという点にあります。運動会は多くの地域において、国家的な儀式という以上に村祭りとして受容されました。そしてこのことは、この催しが国家的な制度の構造や戦略から絶えず逃れていく子供たちの身体を内包していた、ということとも関係していたと思えます。明治政府は繰り返しこうした逸脱していく身体、祝祭する身体というものを排除し、抑圧しようとしていきますが、しかし、実際の運動会はしばしばそういった国家的な枠組みを平気で逸脱していったりします。こうした運動会の村祭りの受容は、各地の学校で催され始めたころから非常によく見られました。この点は見物人の多さによって示されています。実際1890年頃の運動会は、教師や生徒数を遥かに超える数の観衆が晴れやかな服装で集まり、宴を張りながら、競技を観覧していた、という多くの記録があります。そこにいくつか出ていますが、例えば、1883年、物見山山頂で開かれた埼玉県双葉小学校の運動会では、盛装した児童や見物人たちが「小高きところに宴を張り、歌いつつ舞つつ楽しん」だというように、鬼ごっこをしたり、歌を歌ったり、という村祭りとしての運動会が報告されています。運動会の村祭りの傾向は大正期に入って一層顕著になりました。運動会は学校だけの行事というより、地域全体の祭りの行事であったということが、様々に語られていくわけです。町をあげて休みにしたとか、楽団が出たとか、露店が出たとかたくさんの例があります。こういった運動会の祭礼化に対し、行政当局は繰り返し規制を試みています。例えば、文部省は学校の生徒に運動会の際に華美な服装でするのはけしからん。それは注意しなければならぬという注意を行っています。それから、1909年ぐらいになりますと、運動会で仮装行列なんかをやるようになって、お祭り騒ぎ的になってきて、それが全国に見られます。これは学校の風紀を乱し、浮薄の弊風を助長するに違いありません。教師はこれに十分注意しなければならぬ、という訓令が出されていたりしま

す。それから、教育ジャーナリズムやジャーナリズムのなかで、この時期、運動会が盛んに議論されてます。運動会には多額の予算が費やされて、みんな、仮装行列に熱を入れて、お祭り騒ぎにふけったり、そのために学校が何週間も休みになったり、ということはけしからんことであるという批判。あるいは、昨今の運動会は、「あまりにお祭りのなり、演劇的なり。父兄がこれをみるはあまりに物見遊山的なり」といった批判が出てくるわけです。運動会が全国の学校行事となっていくなかで起きたのは、必ずしも国家による児童の身体に対する統制力の貫徹ではなく、むしろ運動会の祭礼化、興行化でした。明治後期を通じて頻繁に出されていく運動会規制の通達や訓辞、それに運動会改善のための諸説は、こうした明治の運動会の実態を反面から照らし出しています。運動会が完全に村祭りになってしまうことは、明治国家にとっては許し難いことであつたに違いありません。明治国家にとって、運動会はなによりも演習であり、また、試験でなければなりませんでした。そのような仕方ですべての枠づけられることにより、運動会は我が国の教育システムのなかで存在意義を主張してきたのです。ところが運動会の実態は、ますます試験である以上に、祭礼に近づいているように見えます。

しかし、こうした事実を認める一方で、我々はさらにこう問うてみる必要があります。運動会の祭礼化は、本当に明治国家がこの列島の住民たちの日常に張り巡らそうとした国民身体の訓育化、あるいは先ほどのエリアスとの関連で考えてもいけませんが、そういったものの戦略から、子供たちや地域の人々が逃れていったことを意味するのでしょうか。村祭りとしての運動会は、国家の祭りとしての運動会と異なる位相を含みながらも、その細部にわたる様々なネゴシエーションのプロセスを通じて、まさしく国家の儀礼化＝規律化のシステムを支えていく、そういった面も同時にあつたのではないのでしょうか。例えば、天長節や紀元節による小中学校の祝祭日の儀礼と運動会が結びついていくということがあります。小中学校の祝祭日の儀礼が

地域社会全体に対してかなり影響力を持っていくようになる日清・日露戦争後になりますと、学校の祭りの時間、つまり紀元節や天長節の時間と、地域のフォークロアの時間というもの相结合し始めます。こういったときにこの二つの時間の流れを、運動会は媒介する役割を果たしています。例えば、地域の氏神祭礼の改良に一度は失敗した長野県のある女学校長は、「その意を移して天長節祝祭大運動会を始めて、八回試みました。当日は、その地方の老若男女が、ともにこの日をめでたき日、面白き日として指を数えて待つようになり、旧来の御祭礼日のようになった」といっています。この運動会は天長節の日や陸海軍の記念日などをとりわけ選んで行っていったわけです。明治・大正期を通じ、学校を重要な儀礼センターとしながら、この列島全域に増殖していった国民の身体を巡る政治学は、人々の祭りの記憶を排除して、近

質疑応答

伊藤：聞いていただいて、お三方の報告が、それぞれ力点は違いますが、大変有機的に絡まり合っているということは御理解いただけたんじゃないかと思います。特に最後の吉見さんの議論が、山下さんのプリティシユ・カルチュラル・スタディズの議論、菊さんのエリアス派の社会学の議論とを大変うまく結びつけたところでなされたように思います。しかも日本の具体的な近代の国民の身体形成の問題に引きつけながら、大変巧みに議論されていたように感じました。カルチュラル・スタディズ側が強調している、国家意志、支配する側の意志と民衆側の意識のずれとといいますか、国家意志と民衆意識がずれながら、調整され、受容されていくというようなプロセスが、吉見さんの議論のなかでは大変はっきりと描き出されています。エリアスや、またカルチュラル・スタディズのグラムシ・ヘゲモニー論もそうだと思いますが、民衆の側の自発的な主体形成というか、内的な主体形成のメカニズムみたいなものが、対抗と親和というか調整と受容のなかで成立していく。一

代的な規律・訓練のシステムを貫徹させようとしていったわけではないのであって、むしろ近代は祭りを発明し、その祭りのなかに村々がフォークロア的な記憶のなかで培ってきた祭りの時間を、むしろ未来に向けて拡張する近代国家の時間のなかに重ね合わせていきながら、国民一人一人の身体を再構成していくという、そういう排除とか抑圧とかいうよりも、重層化とかネゴシエーション、その中での統合化、そういったプロセスというものを考えていく必要があるんじゃないかと思います。

研究部注

以上の議論については吉見氏の次の論文を参照されたい。

吉見俊哉「運動会の思想——明治日本と祝祭文化——」『思想』No.845, 1994.『メディア時代の文化社会学』新評社, 1994.

見自発的に形成されて見える自己コントロールメカニズムが歴史的に成立していくプロセスというのが、運動会という材料を使いながら大変うまく議論されていたように思います。それは単純に国家意志が押しつけられたというようなものではない。午前中のマンデルさんの議論と絡み合うわけですが、操作的な支配の問題とは違う自発的な自己コントロールメカニズムみたいなものが描き出されたと思います。このプロセスは機械的なものではなく、歴史的な文脈のなかで、ずれが生じたり、あるいは何らかの媒介による調整があったりしながら、形成されていく。菊さんが強調したように、その結果として、意図せざる結果というような、国民国家の身体、民衆の身体というものがつくられていく、というそんな議論になっていったように思います。今日の三人の議論は、吉見さんのところで、このようにまとめられているというふうに見とれます。

さてフロアからの質問をとりあげたいと思います。提出されたペーパーをまとめます。ま

ず、身体論、ボディの概念というものが、十分に精緻化されていないという質問があります。身体というのは、個人の問題、人間の問題、意識の問題、無意識の問題、感情や感性の問題、体力、肉体、マナー、とか、いろんな身体概念、見方があるんですが、この身体というものをきちんと精緻化していくことが必要なんじゃないかという御意見です。また、運動会については参加した側のゲーム的なリアリティがはっきりしないとすることも質問のなかに含まれています。

次に、国家の対抗文化、あるいは地域固有の伝統文化を維持することに関する事例、あるいは地域性と運動会の関係について説明して下さい、という質問が入っています。また、戦後のフィジカル・フィットネス、体力、「大なる誤訳」であると書かれていますけれども、体力の考え方に見られるような、日本の近代的身体の捉え方というものを考えていただきたいという質問があります。それは、フィットネスする身体とフィットネスという対象がこれまで外在的に設定されてきた、例えばスポーツマンの最大筋力とか理想的ボディ、男らしさ、女らしさ、そういうフィットネスへのコミットメントを強制されるなかで、身体への権力が入り込んできたのではないのだろうか、フィットネスの対象となる身体というものをもう一度論じてほしい、という御質問です。

もう一方は、お三方それぞれに別の質問で、山下さんにはポピュラリティをふまえた能動的主体とは、具体的にどういうふうに考えた方がいいのか。また、上位の国家権力と対立する、抵抗するもののみを主体というのか、レイモンド・ウィリアムズの、オープン・カルチュラル・スペースを具体的に考えることはできないのか、権力や資本が全て無視しているなかで民主的文化が創造されている可能性があるのか、これはもう全スピーカーにお聞きしたいということです。菊さんには、新たな身体的コミュニケーションの可能性を、具体的に現代スポーツを視野に入れて少し述べて下さいという質問。吉見さんには、盆踊りが運動会と全く同じ経過

をたどったと思います、1917年、この盆踊りは日本青年館主催の競技会に出ることによって男踊りと女踊りの実行者を失って、単純化していきます。この時代の運動会の変化について一つ述べて下さいという質問です。

山下：大変難しい問題ばかりですので答えられませんけれども、関わることを述べます。一つは先ほど身体の問題というものをはずしてしましたので、その問題をちょっと考えてみたいと思います。質問で出されていますフィットネスの問題なんかです。先ほどの吉見先生の話にもありますように、身体の使い方というものが近代という形のなかで序列化されたり規格化されていくわけですが、こういうなかで、抵抗する身体とは、どういうふうに考えられるのだろうかと思うわけです。昨日たまたま、帰りがけに宮城教育大学の久保先生とお会いまして、いろんなお話しをしたんですけれども、特にお話ししたのはドロップ・アウトする子供たちです。こういう子供たちは、いわゆる規格からはずれていくんですけれども、そうではなくて、彼らの持つ様々な感覚とか身振りとか表情とかのなかに、ノーマライゼーションのなかに組み込まれていないけれども、しかし彼ら自身が持つような、可能性がある身体があるんじゃないかということでした。確かに、近代以前のところでも、様々な形で身体の評価というものが必要ついてきますが、それは例えば徒競走で序列化するという気持ちじゃなかったんだろうと思います。力石とか様々な形で民衆的な競いあいというものもあったのですが、そういうなかで近代になって出てきたのがやっぱり序列化なんだろうと思うんです。この辺の議論は伊東明氏の力石研究も引きながら、ドイツのクリューガー氏 (Arnd Krüger) が “Ritual and Record” (Greenwood, 1990) で議論していますので参考にさせていただきたいのですが、そういう近代の規制が被さってくるなかで、しかし、それにのらないものはなんだろうと思うわけです。このことは、実は松村さんの方から出ました、ポピュラリティをふまえた能動的主体に関しての

質問に関わりますし、いわゆる主体の問題に引きつけられるんじゃないかと思うわけです。それで、課題提起だけにとどまるのですが、私たちが近代によって被されてきたものはなんだったんだろうかということなんです。スポーツや近代的な身体技法はそんななかで、ある種の無機的な文化として、近代国民国家をつくる上で、民衆のなかに被せられていったのではないかと。先ほどの身体の規格化の問題と関わってくるんですが、そういう被せ方のなかで、いわゆる日本の近代化の過程のなかで、モダニティとオキシデンタリズムとナショナリズムというものが錯綜して民衆の世界のなかへ入っていく。そこで様々な軋轢を生み出しながらも日本の身体というものを序列化したり、規格化していったらと思うわけです。そうすると、これに対する主体というのはなんなんだろうか、ということです。そのことを見つけていくことが一つの課題ではなかろうか。この問題というのは、やはり今でも続いていると思います。しかし今日の状況は、国民国家の枠がかなり崩れてくる、私たちの意識のなかでも薄れてくるわけですね。グローバリゼーションのなかで、この言い方は少し不正確ですが、一方では日本にとどまらず、アジア的なものから発信するようなローカリティが出てくる。他方では主にアメリカ商業文化を中心にしたグローバルなものが浸透してくるという、ローカルとグローバルの関係が生まれてきているわけですね。これはアジアと西欧文化という対立ではなくて、アメリカを中心とした世界資本の一層のグローバル化の動きと地域的ローカリティの関係といった方が正確なのかもしれませんが、こういうなかであらゆる儀式や行動、そして主体、身体の捉え方が大きく変化してくる。こういう状況も絡めて、あらためて近代によって被さってきたものをみていかなきゃなんないだろうと思います。お答えになってませんが、質問に関連してこのようなことが言えます。

菊：私がエリアスという人物に非常に興味を持った理由の一つは、私が今生きているこの時

代の、自分の身体に対する意識、自分の身体に対する恥ずかしさ、あるいは自分の身体が他の人と同じような動きをすること、そしてあるスポーツの場面で同じような技術を要求されること…そんなことをごくごく当たり前に感じている自分とは一体何者なのかという問いから発しています。それは、例えば外国に行きますとよくわかりますけれど、鼻をかむエチケットやマナーなんていうのは、われわれと全然違うわけです。イギリスでの講義を受講していてびっくりしましたけれども、イギリス人教師がですね、鼻をこう押さえて、鼻汁をピュッと出していっこうに構わない様子なわけです。あるいは、くしゃくしゃのハンカチを取り出して、大きな音を立てて鼻をかむわけです。こういう身体に対する動作や意識、感覚を情緒的なレベルでも受け入れているわけです。受け入れているというのは、みんなが実に情緒的なレベルでそれに合意しているということになります。それはそれで良いんだという、そういう自動的な見方。そして、それはわれわれの頭の中で言語化されたり、合理化されているわけでも何でもないんですね。まあ、今、はやりの言葉で言えば、ハビトゥスですね。いったい、このようなわれわれの感じ方はどこからきているのか。なぜ違うんだろう、ということを経験的に考えたわけです。それが、結局、近代スポーツですとか、制度化されたスポーツですとか、制度化された身体ですとか、抽象身体ですとか、いろいろな言葉で言われている身体のある種の規準を、われわれが自然な形で受け入れていることにつながっていくと思うんです。そして、その自然性というものの自体が、実はわれわれに自然なものをつくらせているのではないか。そんなふうに考えていくと、ある種の偏りを意識することで、歴史的に相対化する目をエリアスは与えてくれたということになると思います。そう、われわれは、どの時代、どこに生きていようと、そのある種の偏ったところにいつも位置しているということになります。

つまり、三浦のいう『身体の零度』というのは、あれは一つの理念型でしかありえないわけ

ですね。どこにもそのようなものはないわけです。けれど、どこかでそれに依拠しながら、われわれは何かをつくっている。日々つくっている。そして、それをお互いに了解し合っている。その行為の原点ですね、それがいつごろから意識されてきたのか、感情的なレベルで、そしてその後の知識的なレベルで。この議論は、山下さんがおっしゃったように、近代主体ですとか、自我ですとか、近代社会は、そういうものの矛盾を前提にしないと成立しなかったんじゃないのかということにつながっていくと思います。そして、エリアスは、その結節点が宮廷社会であり、その後の議会主義化の時代であるとみて注目したのではないかと思います。

エリアス自身について言えば、私は根本的なところで彼には理論と呼ばれるようなものがあるんだろうかといつも思うんですね。確かに、彼はようやく1970年代に入って『社会学とは何か』という本を上梓しますが、先ほど私がお話した文明化の過程に関する考え方についても、やはり具体的な、何かこう、違いというものから入ってくるわけです。具体的に、なぜ身体というものをわれわれは認識するのだろう、ということ。だとすれば、その身体に対する非常な恥じらいですとか、気恥ずかしさですとか、そういうものを伴ったわれわれの身体というものがどのようにつくられていくのか。そして、そこでは、ある種の従順な身体として、われわれがそういうふうを受け入れることによって、われわれが安心するですとか、安定するですとか、そういうものの歴史性とはいったい何なのかという根本的な問いが立ち上がってきます。ということで、私は、このような身体の歴史社会性をエリアスの社会学的な身体論によって読み解いてみたかったわけです。

その中で今日お話をしたかった最大のことというのは、近代スポーツの発生についての二重の意味についてです。暴力を振るうとか、相手を傷つけるということが、もう全く近代社会の中で行われていないわけではないんですけれども、それに対してわれわれの中に強い嫌悪感とサンクションが伴うわけです。そのサンクショ

ンを伴うことを当然のこととして自然に受け入れているわけです。だけれども、その背後には、身体をもって相手の身体を傷つけるということの意味を、まさに意味として考えないまでも、オートマチックに暴力を使っちゃいけないんだということで常に自分の身体の中に染み込ませていく、そういう過程としての身体があるわけです。そして、その象徴として、近代スポーツの時空間というものが成立していく。それによって、われわれのモデルといいますか、アイディアというものがそこに一律に吸収されていく。これが、近代スポーツを成立させたコインの表の意味になります。しかし、その一方で、現代社会のスポーツは、いろいろなスポーツ現象にみられるように、新しいコミュニケーションのあり方を模索しています。これが、先ほどの身体的コミュニケーションとはどういうことなんだということにつながるとは思います。つまり自己規律化する身体ですとか、暴力を振るっちゃいけないですとか、いわゆる模範的な演技をしなくてはいけないですとか、序列化していくことを受け入れていく身体ですとか、そういうものに飽和状態になっていて、それ以外の、われわれがとるに足らないとか、くだらないとか思っていることへ逸脱しようとする、そういう身体的コミュニケーションのあり方ですね。そして実は、近代スポーツの発生が、そういう身体のある様をもコインの裏側で同時に受け入れることによって起こったのだということが大切だと思います。むしろ、そのこと自体が、現代のスポーツにおいては非常に重要視されていく。

そういう身体への見方、まあダニングの言葉で言えば、最近翻訳された『スポーツと文明化』の原題である“Quest for Excitement”ですね。Excitementする身体とは何なのか。それは単にカタルシス、つまり制度化された身体の中で、一つの処理機構としてスポーツが位置づくわけではないのだと。まさに、それは、Quest for なのだ。forとして求めていく。そういう中で、われわれとまた多様な新しいマナーですとか、そういった類いのものを許容していくとか

…、そしてある種のスポーツ場面では、新しい一つの文化をつくっていくとか、そういう何か積極的な作用が働いているんじゃないか。そして、それは相対化することでしか見えないんじゃないか、という気がするわけです。そういう意味で、今日エリアスの身体の問題を取り上げてみたのです。

ですから、私がここで申し上げたかったのは、われわれが常識化している身体観というもの、常に近代的な身体としてわれわれに要求されてきたものであって、それは決して零度としての身体でもなければ、理念としての身体でもない。むしろ、そこから何か新しいものが見えてくるんじゃないかと考えます。何も答えになっていないと思いますけど、また何かいろいろフロアから出したら、言わせていただきます。

吉見：私に向けられた御指摘・御質問は次の四点だと思うんですが、一番目は、参加主体のリアリティというのが、まだ十分に捉えられていないのではないかという御指摘。二番目が、地域性、地域の固有性と運動会との関係がどういうふうになっているのか、ということです。三番目に権力と資本の外部に民衆文化の生成の契機がどうあり得るのかどうなのか。そこに対してどう考えているのか。で、第四番目が、1917年前後、大正中期の盆踊りの非常に面白い例を教えていただきながら、この時期の運動会に、盆踊りのなかでの男踊りと女踊りがあって、女踊りが消えていく、というプロセスと似たようなものがあつたんじゃないかというようなことです。この四番目から逆にさかのぼる形にさせていただきます、私の考えを述べさせていただきます。四番目の大正中期の問題は非常に大きな問題で、ここには二つのことをさしあたり申し上げておきたいと思います。一つは盆踊りの場合に出てきたジェンダーの問題ですが、特に女性的身体性と運動会とが、どう関係していったのか、あるいはそこに排除の構造というものがあることによってあつたんじゃないかという問題は非常に重要なのですが、今日申し上げた運動会論

に十分組み込めていないんです。で、これは十分組み込む必要があると思います。ジェンダーの問題というのは我々の文化の問題、大衆文化や、それこそ近代的な身体の問題に関わるときに、最も重要な柱であるといっても良いぐらいで、是非それはそういう視点で考えていきたいと思います。それからもう一つ、先ほどの件に関しまして、答えというよりは、できてないということを述べるにとどまるのですけれども、主として今日問題にしたのは明治20年代から30年代、つまり1880年代から90年代を中心とする、運動会の成立と展開という話だったと思うんです。私は明治20年から30年代、日清・日露を契機とする1880年代から90年代にかけての動きの問題、そこでなにが変化していったか、文化の構造になにが起こったのかが一つ重要になるんですけれども、やはり1920年代から30年代の動きというものがもう一つのポイントで、1917年の変化というのは中間ですけれども、どちらかというと20年代以降の変化にかなり関わってくるように思えます。これは、明治神宮の体育大会の組織化の問題ですとか、オリンピックから小学校の運動会までのナショナルな制度がもっとかちっと確立していくまでの問題ですとか、マスメディアに媒介されたスポーツ・イベントがこの時期から非常に起こってくる問題ですとか、いろんな問題が残っていると思います。それから三番目の話なんですが、権力や資本の外部の民衆文化の契機というのは、おそらくあるネーション・ステイトや資本主義の発展の段階まででは考えられるかもしれないという気もするんですが、ただ私自身はネーションとか資本というものが作動していく、その過程自体のなかで民衆文化的といわれるような契機と相互媒介的な状況に入ってゆくという、いわゆる媒介的な局面、ネゴシエーションが多層的に成立している局面に注目することの方が戦略的に意味があるんじゃないかというふうに考えてます。というのは、現代社会のなかで、国民国家、それからキャピタリズムというものの、我々の身体を捉えている、あるいは我々の文化を捉えている、やっぱりすごい根深

さ、だけでもその中になお相対化の契機とか、
対抗化の契機とかが内在しているわけです。そこをみていくためには、権力や支配の内部と外部ということを分けてしまわないで、むしろそれが重層化している状況、その中に起きる政治学、ポリティクスをみていくことの方が重要なのではないかと私自身は考えています。それから、二番目の話に戻るんですけども、地域の固有性と運動会という話ですけども、この場合、地域性とは何か、ということが非常に問題になってきます。つまり地域というものを所与のものとして、あるア・プリオリなものとして捉えるんじゃないくて、近代的な国民国家の編成とか様々な権力による媒介とかいうものをうけて構成されているものと私は考えたいですね。これは、在郷軍人会とか町内会の問題と絡みますけれど、つまり地域、ローカルなものとなショナルなものが対立して、別のものとしてあるのではなく、むしろ入れ子になっているとか、ローカルもののなかにナショナルなもの、そこから逸脱してゆくものが、重層的に存在しているというふうに考えております。それから、最初の話に戻りますが、参加主体のリアリティの問題というのは大変難しい問題で、例えば同時代的に人類学的方法を使って、エスノグラフィーをやっていくというのはあるんですが、これは方法の問題だと思うんですけど、特にエスノグラフィーの問題だと思うんですが、実際フィールドワークをして、そしていろいろ聞き書きをしたりヒアリングをして、参与観察をしたりして、あるリアリティを浮かびあがらせてゆくという方法があるんですけども、例えば明治時代の問題を考えるのにそういう方法はさしあたり難しい。でもなんらかの形でヒストリカル・エスノグラフィーがありえると思ってます。例えばアナール派の仕事やギンズブルグの仕事がありますが、例えば何か出来事からリアリティを浮上させていったり、それから、資料操作の問題を、もう一回考え直してみたり、というもっと方法的な洗練化とか、方法的にもうちょっとその辺の問題をつめて考えてみるとか、ヒストリカル・エスノグラ

フィーとして考えておく必要があると思います。

森川貞夫（日本体育大学）：今の質問との関連になりますが、吉見さんにお聞きしたい。例えば、明治期の労働組合期成会の運動会や、壮士運動会などがあります。これは警察権力によってあまりにもたくさんの人が動員されるということで禁止・中止されたりしますが、こういったものは運動会の流れのなかで、対抗文化的に捉えた方がいいのか、あるいは先ほど説明された重層化というなかでどのように位置づけるのかということです。それともう一つは、さきほどの民衆娯楽という言い方ともつながると思いますが、例えば男の子の節句に家族で裏山にのぼってごちそうを食べたり、あるいは花見をしたりお雛祭りに何かしたり、そういうものが労働組合の初期の段階で観桜会といった形で行われます。こういったものは先ほど何か民衆的なもののなかに国家に取り込まれない部分、対抗文化的な行動、あるいは行事といいますか、その辺の位置づけをどう捉えるかそれをお聞きしたい。

吉見：まさにその点は意識はしていたんですけども、つまり前者の方は、自由民権運動の運動会、あるいは政治運動の運動会と学校のスポーツの運動会の関係の問題と関わってくる。今日の話は、学校の子供たちの世界の話に限定しているわけですけど、本当に運動会の問題を考えると、もう一つやっぱりそういう自由民権運動との関係での運動会の問題もちゃんと考えなくちゃいけない問題として非常にあります。ただ、その場合でも、対抗文化的なのか、支配文化的なのか、ということはア・プリオリに最初から決められないんです。そうではなくて両面を含んでいたと。ただ、今のおっしゃられた自由民権運動との関係でいえば、そこと学校の運動会の間に何らかの連関があるのか、あったとしたら、どのように時代と連関しているのかをまず調べなければならないのですが、そこが資料的に調べきれなくて、押さえきれ

てません。

坂上康博（福島大学）：吉見さんと山下さんにお聞きしたいんですが、国家意志と民衆意志を単に二項対立的に捉えるのではなくて、そこに媒介や調整があって、それが非常に巧みに働いているところを見て行こうとする点、大変おもしろいのですが、もう少し根が深いのではないかと思うのは、民衆が自らすすんで権威なり権力を求めるということ、この辺をどういうふうに議論に取り入れるべきか。民衆思想史の分野では安丸氏の『近代天皇制の形成』というすぐれた仕事がありますが、そういうことは身近でもいっぱいあって、たとえば天皇杯がそうですね。そういうことと結びつき絡まっているのですが、民衆が自ら権威や権力を求めてきた。吉見さんが対象にされた時期で言うと日清戦争が一つのインパクトとなって、民衆自らが戦争で戦う兵士としての身体の必要性を感じはじめていく。あるいは天皇が国家のシンボルとしてのものすごく権威を高めます。日清戦争の前と後では民衆の意識に決定的な違いがあると思うんですが、そういう問題をどのように議論していったらよいのか、その点お聞かせ願いたい。

山下：カルチュラル・スタディズの方から考えを述べさせていただきたいと思います。むしろこれは伊藤先生に聞いた方が良いと思われる質問ですけども、この問題は同意の調達がどういう方式で行われているかという問題だと思います。民衆がすすんで権力や権威を求めていくという、まさにこのメカニズムにこそ注目しなければいけないわけで、そのところがカルチュラル・スタディズ、とりわけヘゲモニー論でとらえている問題なんだろうと思います。この場合考える必要があるのは、すすんでという、自発性というものをどう考えるかということです。ある意味で「強制」というのは外部的な力だけで行われるのではなくて、同意を獲得していくなかで、自発性を引き出していくなかで出てくるものであろうと思います。これが近代市民社会の権力の発現様式であるわけで、こ

このところをどう捉えていくかということですよ。ハーグリーブスがいつてますように、このところにこそまさに文化を介在して、自分たちの経験をもう一度大きなものに結びつけてしまう、文化の権力的作用が存在するわけです。このところでは日常生活の中に「毛細管状」に入り込んでくる、よりポピュラーなものが重要なわけですから、スポーツやポピュラーミュージック、テレビ番組など、ポピュラーな文化というものは非常に重要になってくるわけです。カルチュラル・スタディズにおいてスポーツが一つの主題的位置を持って分析されるのもこの意味を持つからです。ここにどういう権力作用が働いているかを見ること、また逆にそこにどのような摩擦や、あるいは抵抗の契機が現れてくるのかを見ることが重要です。しかし、カルチュラル・スタディズでは何度も強調されていることですが、実際これがどういう契機を持って表れてくるか、どんな従属性を持つか、またそこにどんな逆転があるかは、その時々へのヘゲモニー編成全体を見ながらも、具体的な局面を一つ一つ分析するしかないといっています。私も同意見です。具体的な場面はそうではしか捉えられないだろうと思います。

吉見：私も司会者の伊藤さんが答えるのがいいんじゃないかと思いますが、質問の主旨はよく分かります。ただ、私の意識としてはできるだけ民衆を実体化したくないんです。一つの共通のアイデンティティを持った、そして共通の指向性を持ったある集団なり、層として、民衆をひとまとめにして考えるということを私はできるだけやめたいと思っています。それは民衆といっても、ジェンダーによって違うわけですし、その中における階級の問題もあるでしょうし、地域の問題もあれば、エスニシティの問題もある。だからそういう諸々の次元の絡まりの中に「民衆」を一度脱構築してみることが必要なんです。確かに権威に対して服従していくというプロセスは全体としてあるわけですが、では権威に対してどういった意味を付与していったのか、天皇なら天皇に対してですね、どうい

うふうな解釈が為されていったのか、といったことを考えてみると、一見そこに画一的に統合されているように見えながらも全然違う読みとりが拡散されていて、それらが組み合わせられて、結果的にあたかも非常に画一的に統合されているかのように見えるシステムが作動していることがあったんじゃないか。二項対立的に民衆と国家があって、あるいは権力と民衆があって、民衆が権力に従属している、という形ではできるだけ捉えたくないというふうに思っています。

松村和則（筑波大学）：大変シンプルな質問ですが、その前に、山形の中学校の一つの事例をあげたいと思います。昨今のサッカーブームで、サッカーファンの校長がある中学校に赴任し、その校長があるサッカー好きの教師を引っ張り、中学校をブームに引き入れようとした。一方で教師の負担は増えるので、クラブの担任を二人にして、そうすると指導にばらつきができ、担任のいないクラブができてしまう。そこであてがいぶちがない種目が出てきます。そういう種目は、一年生に入部をさせないようにするなどして現実につぶされて行くんです。そういう事態が出てきた。今日のマンデル氏の講演は現代スポーツをちょっと楽観的に見すぎているような気がしましたが、先生方は現代スポーツにどんな可能性を見、あるいは、ペシミスティックに見るか、オプミスティックにみるか、イエス・オア・ノーでお答え下さい。

伊藤： 私は今日のマンデルさんのお話の中にあった、左翼のスポーツ批判はクリティカルな部分を強調しすぎて、スポーツにおける、身体を動かすことからくる人間の喜びや快楽というものを見失っているというのは事実だと思います。でも、その指摘は正しいとは思いますが、同時に現代スポーツが資本主義に汚染されているのは明らかであるし、近代スポーツにおいて男性支配のメカニズムが果たしていった役割も明らかだと思います。だから、答えはイエス・ノーじゃない。僕はペシミスティックなオプ

ティミストなので、現状に関してはペシズムですけれども、スポーツに関してはオプティミスティックに考えたいと思います。

山下：やはり、イエス、ノーでは答えられないのですが、以前、国家主義的なスポーツということに対する批判の本が新泉社から出ていました（村田豊明『ゆれ動くスポーツ観：国家主義から個人主義へ』新泉社、1982）。そこで既にとらえられているのですが、今日の状況はこれまで正統性を付与してきた国家の枠組みから離れて、一方では消費権力に結ばれていくと同時に、しかし他方では、スポーツの意味を自己の日常の生活世界に結びつけるという動きがかなり起こっているのではないかと思います。私はそこに両義性を持っているが、一つの肯定的な側面が出てきているのではないかと思います。

菊：過去を振り返ると言いますか、まあ、エリ阿斯ならエリアスの窓を通じて、身体の規定性とそこにあるのはいったい何なのかを問う作業は、近代スポーツの限界を相対化しつつ、それを乗り越えようとする意識があるからじゃないかと基本的には思っています。しかし、これは、研究者のレベルで言っているだけで、実際の学校は松村先生のおっしゃる通り、そういう戦略を使っているじゃないかということもあります。けれども、そういうことに対する子どものある種の抵抗ですね、あるいはわれわれは一般的にそれを逸脱と呼んでいるのかもしれませんが、いずれにしてもそれはおかしいと思うことへの問い返しは、徐々にではあるけれどもできていないかと思うんですけれども…。

教科教育のレベルでも、さまざまなことが言われていて、その中で教師が、もう一度自分たちが当たり前だと思っていた教師と子どもの関係や、身体の問題も含めてその問い返しが始まっているのではないか。それは競争のイデオロギーというレベルだとか、共同、共生だとか、そういう大上段に振りかぶったレベルでないところで、どうも出てきている面があるん

じゃないかなと。むしろ、それがエリアスの言うフィギュレーションの一つの形として出てきているのではないかと思うんです。確かに、今のわれわれはいったいどこに行くのかわからないけれども、何かそういう動きが出てきているような気がするの、そういう意味では現代スポーツの可能性に、僕はイエスという答えを出したいし、出さなければならないと思います。

吉見：スポーツでも音楽でもかなり重なると思うんですが、我々はそれに身体ごと関わってるし、それからそういうなかで生きてる。そうするとその中で可能性を見いだすためには、つまり可能性を見いだしうるというのは、やっぱりそこに身体があるから、可能性が存在する。ただそのときにその身体というのは、社会性を欠いた自然の身体ではまったくなくて、まさに資本主義化され、ナショナライズされ、コロニアライズされ、様々な制度をすでに内包した我々自身の身体でしかない。だからそういった身体に対してクリティカルであることを通じて、可能性を見いだしうる。そういった基本的な認識から様々な探求、それこそカルチュラル・スタディーズ、文化の批判的な研究を出発させていくことができると思っています。

伊藤：質問にもありましたように、今日のテーマが、自己コントロールしている身体というイメージが強かったもので、有機体としての身体ですとか、快楽を感じる身体であるとか、苦痛を感じる身体であるとか、自分が自由にできない身体とか、もうちょっと身体というものを多元的な眼でみる必要があったというのは事実だと思います。また今回のセッションは、今、吉見さんのいったことと絡むんですけども、ジェンダー化された身体であるとか、あるいはグラムシ流に言えば主体化されることで従属化する身体というか、身体と自己コントロール、とくに、近代国民国家のなかでの国民としての身体形成の話が中心になっていたと思います。それは、エリアス流に言えば、文明化された身体というものと関わってくるし、カルチュラ

ル・スタディーズであつたらヘゲモニーの問題と
いいですか、自発的な同意形成のメカニズムにかかわってくると思います。民衆の身体的な同意形成メカニズムは、支配者の側の意図や、歴史的で関係的なプロセスのなかで、生成してきたものといえます。コントロールされている本人は、自発的に自己の身体というものをコントロールしていると感じているようなコントロールの仕方です。今日の報告は、こうした主体形成の問題を身体と絡めて議論するという点で、ある面共約可能な部分があつたと思います。しかしカルチュラル・スタディーズとエリアス派の視点は違っている。菊さんのレポートを読んでもいただければ、カルチュラル・スタディーズとエリアス派の違いはお分かりになると思います。そういう両者の議論を吉見さんの運動会という具体的な研究で重ね合わせることで、今日のシンポジウムはすすめさせていただきました。

冒頭に申し上げましたが、来年私たちがが予定していますのは、近代国民国家におけるスポーツと身体、ということ、まさに今日やってきたカルチュラル・スタディーズの問題やエリアス派の問題、あるいは今日出てこなかった、（実は少し出てきてはいたんですが）フランスにおけるブルデューの社会学、フーコーの理論、そういうものと絡み合わせながら、スポーツ社会学として、理論的な可能性を探っていくつもりです。しかも日本の近代国民国家の問題と、ヨーロッパや北米における国民国家の問題、そのずれや違い、あるいはその相同性というものを考えていく。しかもスポーツを通して考えていく方向で来年度はこの企画の継続を予定しています。うまくいくかどうかはみなさんの御協力にかかっているわけですが、来年も、是非とも来年は京都の立命館でこのシンポジウムの継続として、国際シンポジウムを成功させたいと思っております。どうもありがとうございます。

Special Topic : Theoretical Possibilities for the Sociology of Sports

ITO Kimio

Key words : theory of sports sociology, Cultural Studies, Figural Sociology, athletic meet, sports in modern Japan.

This report summarizes presentations and resulting discussion at the symposium titled "The Sociology of Sports: Searching for Theoretical Possibilities" hosted by Miyaghi Kyoiku University in March 1996.

The purpose of the symposium was to consider the development of sports from the perspective of the body, and to explore theoretical perspectives of modern sports sociology. The Miyaghi symposium also coincides with the international symposium to be held in March 1997 at Ritsumeikan University in Kyoto. The symposium brought modern sports sociological theory together with the theories of cultural studies and Elias. The development of modern sports culture in Japan was also considered.

From the perspective of sports sociology, YAMASHITA Takayuki summarized the arguments of cultural studies advocates –arguments that are becoming increasingly visible in many diverse fields. With its focus on popular culture, cultural studies poses a distinctive critique of the study of culture. In addition, Yamashita correctly pointed out that cultural studies (particularly the British version), broadly influenced by Marxism is concerned with questions of hegemony discussed in the work of Antonio Gramsci.

Hegemony is not looked at simply as a relation in which the culture of a dominant group is forced onto (and accepted by) the subservient. Instead, the culture of the subservient group is formed by the subservient group itself through a process of both resistance to and collusion with the dominant culture.

Analysis of the culture of sports from this perspective leads to new insights.

In his discussion of sports sociological theory, KIKU Koichi laid out in detail the counterargument to cultural studies posed by Elias scholars –an argument increasingly heard and gaining in currency.

Elias' Figuration Sociology and the developing work of Dunning and other English sports

sociologists (influenced by Elias) critiques simple views of the development of history. As is widely known, Elias' argument concerning "process of civilization" is a classic example: the "process" of the dynamic development of history occurs within the interaction (dependence, reinforcement) of various elements. KIKU carefully presented Elias' complex argument, making the substance of it clear.

YOSHIMI Shunya described the connection between sports festivals and the development of the nation-state. Using the backdrop of cultural studies and Elias, Yoshimi's inclusion of discussion concerning early modern Japanese society was particularly appropriate given the theme of the symposium. Yoshimi's description of the "sports festival (Undokai)", a "modern Japanese invention," as a place where the gap between the will of the nation and the will of the people and the resulting resistance, collusion, and affinity could play themselves out. In a sense, Yoshimi's work brings together the arguments of both cultural studies and Elias. Yoshimi's appropriate application of theory to real events makes his work especially interesting.

The symposium will serve not only as an aid in the development of sports sociological theory, but will also contribute toward the success of the international symposium in 1997.

Special Topic: Theoretical Possibilities for the Sociology of Sports

1. YAMASHITA Takayuki. "Sports Sociology Possibilities : British Cultural Studies and Sports Research."
2. KIKU Koichi. "Sports Sociology Possibilities : Elias Scholars and Sports Sociology."
3. YOSHIMI Shunya. "Modern Japan and Sports : Thought Concerning Sports Festivals
—The Meiji Era and Festival Culture."